

シルクロード踏査報告

— 仏教東漸のオアシスを中心として —

山田 勝久

遙かなる都、長安を訪ねて

シルクロードの起点である長安（現・西安市）は、11 王朝が約 1000 年にわたって帝都を置いていただけあって、市内のいたるところに名所旧跡があった。天井のない博物館といわれる韓国の慶州を訪ねた時にも多くの史跡があったが、長安は比較にならないほど広大で、その 20 倍前後の遺跡が残っていた。

長安が最も栄えたのは、唐王朝の時代である。¹ 人口は 100 万をはるかに超え、一説によれば王城の外の住人を入れると、さらに 30～50 万人は増え



唐の玄宗や楊貴妃が、外国の使者を接待した長安の華清池の宮殿

ると推測されている。

町には、タクラマカン砂漠を越えてやってきた、インド人・ペルシア人・ソグド人等、54 カ国の人々に賑わっていた。その中でも西市には、「胡商 8000 人」が移り住み、エキゾチックな彩りを添え、『旧唐書』には、その異国情緒あふれるさまを、「士女みな胡服^きを衣る」、すなわち男も女もみな西域の衣服を着るようになったというのである。さらにインドの音韻学の流入の影響を受け、絶句や律詩といった近体詩が誕生した。中国古来の伝統的なゆるやかな歌舞にも影響を与え、テンポの速い舞が好まれるようになり、白楽天はその様子を「胡旋^{こせん}の女



遣唐使として中国に渡った井真成は、734 年、36 歳で長安の官舎で死去した。その石碑に刻まれた墓誌の全文

¹ 唐代の長安の全体像については、唐の韋述『兩京新記』、北京の宋敏求『長安志』、元の李好文『長安志図』等がある。また、『唐詩の光彩』山田勝久著（笠間書院、5～21 ページ）に詳しい。

胡旋の女、心は弦^{げん}に応じ手は鼓^こに応ず」と歌っている。



井真成の墓誌が発見された西安の東にある万年県の滻水。
この川の左岸から 2004 年 10 月に出土した

ところで、2000 年の眠りから目覚めた秦の始皇帝の兵馬俑は壮観であった。一緒に旅をしていた北海道教育大学の美術科（彫塑）の長谷川工教授は、私に向って、「現代の工芸技術でも、これだけの作品は造れませんよ」と感嘆されていた。また、楊貴妃や玄宗ゆかりの華清池からは、唐代の温泉風呂も発見され、^{しょうかい}章 懷太子陵墓の壁画は、長安の平和で華麗な生活ぶりを余すところなく今に伝えている。長安は阿倍仲麻呂をはじめ、唐代だけでも

約 2300 人の日本の留学生在が勉学に励んだ町である²。

2004 年 10 月、わが国の井真成^{せいしんせい}という遣唐留学生（請益生）^{さんすい}の墓誌が、長安の東の滻水の西の岸^{せい あざな}から出土し注目を集めている。その墓誌の訳文は以下のようなものである。「公は姓は井、字は真成。



井真成の墓誌を発見した西北大
学博物館の賈麦明氏

国は日本という、才は生まれながらに優れていた。そこで命を受けて遠い唐の国へ派遣され、馬を走らせ訪れた。唐の礼儀教育を身につけ、その風俗に同化した。正装して朝廷に立ったなら、並ぶものはいなかったに違いない。しかし、誰が予想したことだろうか、勉学を

成し遂げないうちに、思いもかけず三途の川を舟で渡り、馬を

走らせ柩を運ぶことになろうとは。開元 22 年（734）正月□日に官舎で亡くなった。年齢は 36 歳だった。皇帝（玄宗）はこれを傷み、死後に追贈する官位を典籍法令にのっとり、詔勅によって尚衣奉御の官職を贈った。葬式は国葬とした。すなわち、その年の 2 月 4 日、（日本は東にあるので長安の東方に位置する）万年県²の滻河の原に葬った。礼に基づいてである。

ああ、夜明けに柩をのせた白い車を引き、葬式の行列は赤いのぼりを立てて哀悼の意を表した。遠い国で夕暮れに倒れ、荒れ果て



滻水の橋の上に立っていた看板。
滻水と灞水の文字が見える

² 『後漢書』巻 85・東夷列伝に「建武中元二年、倭奴国奉貢朝賀。使人自称大夫。倭国之極南界也。光武賜以印綬。安帝永初元年、倭国王帥升等献生口百六十人、願請見」とある。

た郊外の果ての墓陵で夜も悲しんでいる。その言葉に言うには、死ぬことは天の常道だが、悲しいのは遠方であることだ。身体はもう異国の地に埋められたが、魂は水の流れに乗って故郷に帰ることを願っている」とある。

西安から来た大学院生に夏休みに祖国に帰った時、西北大学の賈麦明先生を訪ね、墓誌発見の詳しい経過を、聞いてくるように依頼したところ、院生は詳しく聞いてきたと言って、以下のことを知らせてくれた。併せて二人並んだ記念写真も見せてくれた。その報告によると、西安も人口が増加して、マンションは郊外にも建てられるようになった。西安の東の滻水の河畔に、5階建ての住宅を建設するため土地を掘り下げていたところ、機械



鳩摩羅什の舍利を納めた草堂寺

のツメに石板があたり砕けた。田舎から出てきた出稼ぎ労働者は、運転席から降りてその石板を見ると、文字が刻んであった。そこで、現場監督に報告したところ、そのあたりに立てかけておくようにとの指示だった。一日の仕事を終えての帰り、現場監督はその石板を小脇に抱えて、タバコ钱ぐらいにはなるだろうと思って、骨董店に持って行った。店主がいくらで購入したか今は不明であるが、とにかく 1000 円で売ったのだから、それ以下で買ったことは間違いない。店主は、店頭で定価 3000 元と値段を付けて立てかけておいた。



西安の草堂寺にある鳩摩羅什の生涯を描いた絵画中、7歳の時に母に従って出家した時のようす

2004年10月のある日曜日、西北大学博物館の賈麦明氏は何か掘り出し物はないかと一人ぶらぶらと骨董品街を歩いていた。通りすがりに何とはなしに「日本国・・・」という文字が目に入った。どうせ偽物だろうと思ったが、それにしても良くできている。主人にいくらかと尋ねたところ3000元だと言ったが、交渉を続け1000元（1万数千円）で買うことにした。大学に戻り、考古学や歴史学の教授にも見てもらい、唐代の墓誌であることが判明、新華社通信を通して、全世界に発信されたのである。

誌蓋は覆斗状、青石質で、底面の一边の長さは37センチ、厚さは7センチ、篆書である。墓誌は厚さ10センチ、文様と飾りは無いが、表面に掛線があり、文字は楷書、刻印である。全部で12行、171文字で構成されており、最後に4行の空白

の部分と9文字の欠字がある。

井真成と阿倍仲麻呂の交友関係の有無については、互いの地位、在留期間、死亡年などを総合的に考えて、交流はなかったものと思われる。2015年10月16日、私は瀋水のほとりの発見現場を訪ね、出土地をカメラに収めた。その夜、西安のホテルで約3時間、賈麦明氏と懇談した。そして改めて井真成の墓誌の発見の詳細をうかがった。それは院生の報告とは全く異なるものだった。

2004年10月のある日、一人の人物が石板を持って西北大学の博物館にやってきて、この墓誌は本物が偽物が鑑定してほしいといってきた。本物であったので博物館が購入した。博物館の窓口で最初に受け取ったのが賈麦明氏だというのである。私は会見終了後、同席した通訳にどちらが正しいのか尋ねたところ、苦渋に満ちた表情で両方正しいとの返事であった。この11年間の歳月の流れにあって、何らかの事情が発生したのだろう。

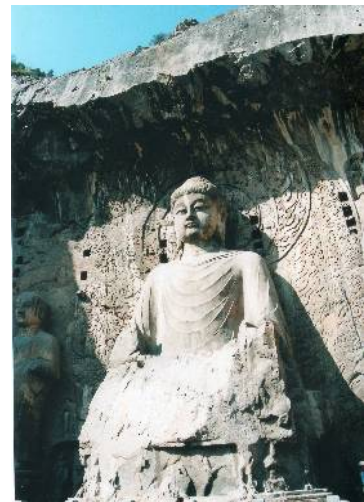
次に、何といっても私が長安で一番好きなのは、郊外にある草堂寺^{そうどうじ}である。その堂宇の中には、はるばるシルクロードの亀茲国^{くまらじゆう}からやってきた、訳経僧の鳩摩羅什の高さ1メートル程の8角の舍利塔がある。そこに書かれた銘文のすべてをカメラに収めることができた。晩年の羅什は、後秦の国王の保護のもと長安の逍遙園などで5年余にわたって、サンスクリットで書かれた仏典を正確に漢語に翻訳している。その偉業は日本にも大きな影響を与え、羅什訳の經典約300巻のうち、約250巻が奈良の正倉院に収蔵されている。特に法華経は名訳で、唐の玄奘も法華経には手をつけていない。

日中文化交流の原点の町、洛陽

2002年10月、私は奈良県橿原市が企画した洛陽訪問団の顧問として、「平成の遣唐使船」に乗り大阪港を出発した。西暦702年、栗田真人らが藤原京（橿原市）から洛陽に向かった第7次遣唐使の労苦に思いを馳せ、1300年の佳節を記念して、船で同じコースを行くことになったのである。

洛陽は千年の古都、長い歴史と文化が薫る9王朝の帝都である。その町の美しさを、梁王朝^{かんぶんてい}の簡文帝は、「洛陽は佳麗なる所、大道に春光満つ」と歌い、唐の詩人劉希夷^{りゅうきい}も、「洛陽城東^{じょうとう} 桃李の花」と詠んでいる。

後漢の建武中元2年（西暦57年）、「倭^わの奴国^{なこく}、貢を捧げて朝賀す、使人は自ら大夫^{とな}と称う。倭国の極南界なり。光武は賜うに印綬を以てす」（『後漢書』東夷列伝）²とあるように、日本の



洛陽の龍門石窟の奉先寺大仏は高さ17メートル余もある

使者が初めて洛陽を訪問、その折、光武帝から金印^{しじゅ}綬を賜った。それが、江戸時代の天明4年(1784)に博多湾の志賀島(福岡県)で発見された「漢^{かんの}委^{わの}奴^{なの}国王」印である。2.3センチ四方、重さ108グラム、持ち手の形が蛇をデザインしたもので、印台と一体になっている。「委」は「倭」の省略形である。現在、福岡市博物館に所蔵されている。

ところで、『後漢書』東夷列伝によれば、安帝の永初元年(107)、倭国王^{ずいしょう}師^し升^{しょう}等は、青年男女を160人。238年、邪馬台国の卑弥呼の使者として大夫^{なんしやうめ}難^{なん}升^{しょう}米^め、次使都市牛利^{つしごうり}は魏に「男生口四人・女生口六人・班布二匹二丈を奉り、以ちて到る」(『三国志』倭人)とあるように、朝貢する時の贈呈品の一つとして、青年男女を加えていることは注目に値する。『魏志』倭人伝によれば、翌年、景初3年(239)に下賜された金印「親魏倭王」は未だ不明であるが、三角縁神獣鏡100枚は、島根県の神原神社古墳や畿内や北九州から多く見つまっている。

ところで、卑弥呼の使者が派遣された時代と同じ頃、大月氏のヴァースデーヴァ(波調)も魏に朝貢し「親魏大月氏王」の金印を下賜されている。異民族の有力者にも印綬や王の称号を与えることで、皇帝



洛陽の白馬寺の東に聳える齋雲塔

を頂点とする体制の中に組み入れようとしたのである。倭と大月氏の使者は洛陽の四夷館(南館)で共に生活している。卑弥呼の使者たちは、朝夕、仏に向かって礼拝する大月氏の使節の姿に接し、異国の宗教に強い関心を抱き、それが仏教であることを知ったと思われる。おそらく経典の一部も手に入れ、帰国後、卑弥呼に報告したことであろう。仏教伝来の日本への公伝は、百済の聖明王の時代である³。私伝としてはそれよりも300年も遡る卑弥呼の時代³に、早くも日本人は仏教の存在を知ったと思われる。なお、高句麗に仏教が伝来した公伝が372年、百済が384年、新羅が514年であるので、その公伝よりも日本への仏教伝来の私伝は古いことになる。

ところで、古代中国の文人、楊街之^{ようげんし}の『洛陽伽藍記』によれば、後漢の明帝は夢の中で金人(仏像)を見たので、蔡愔^{さいいん}・秦景などを天竺(實際は于闐国)に派遣してこれを求めさせたという。永平10年(67)彼らは、白馬に仏像と仏典を載せ、迦葉摩騰^{かしやまとう}、竺法蘭等を連れて帰国、これを記念して建立されたのが白馬寺である。

なお、白馬寺伝説が中国への仏教伝来の公伝となっているが、私はそれよりも半世紀ほど遡ることができると思っている。その根拠は、司馬遷の『史記』の「蘭相如伝」や『戦国策』の「和氏」に記載されている「連城の璧」、すなわち「和氏の璧」の記述による。「完璧」の語の由来となった「和氏の璧」

³ 日本への仏教伝来の公伝は、538年に百済から仏像・経論が贈られたことに始まる(諸説あり)とされる。私伝は、邪馬台国の卑弥呼が魏に使いを送った239年、洛陽の都での大月氏の使者との交流の時であると思う。私は2015年8月のテレビ放映の中でもその説を公表した。番組名は『京都 国宝浪漫』BS11、「仏教伝来・花開く平安京」である。

は名玉として知られ、世界でホータン（古代・于闐国）だけから出土している。すなわち和氏という人物が前8世紀に楚の厲王に献上し、武王を経て文王の時代になってやっと磨かれた名玉である。この名玉が長江流域の楚の国にあるということは、インドにおける仏教誕生以前から中央アジアやインドと中国は、ダイナミックに交流していた証である。なお、河南省の殷王朝の前11世紀頃の墓から、アフリカ人の頭骨やビルマ沖でしか採れない亀甲が出たことは、ユーラシア大陸の人々は、すでに3000年前から行き来していたことになる。私自身、甘肅省の張掖の博物館で約2000年前の黒人の俑を見つけ、驚いたことがある。庭で掃除をしている黒人俑は、明らかにアフリカからの渡来人であった。

西暦前後から2世紀頃にかけて、仏像や仏典が成立すると、ガンダーラとホータンの地理的、文化的な交流からいって、堰を切ったように長江流域に仏教は東漸した。黄河中流の洛陽の西暦67年説は公伝であって、私伝としての長江流域の仏教伝来は、それよりも50～60年は遡ることができると思う。

洛陽の龍門石窟の対岸には、わが国の平安文学に大きな影響を与えた唐の詩人、白樂天の墳墓がある。今、54代目の子孫である白謙恭^{はくけんきょう}が墓守をしており、書家としても名を馳せていた。私の訪問を大変に喜んで下さり、白樂天の詩句「野火焼けども尽さず、春風吹きて又生ず」と揮毫し、さらに、貴重本である『白氏世伝家譜』をいただいた。私は、白樂天に関する研究を含めた『唐詩の光彩』（笠間書院）を出版したばかりであったので、返礼としてその新刊本を贈呈した。

蘭州（金城）の炳靈寺の仏たち

中国・甘肅省の省都である蘭州（金城）は、黄河上流に位置し、2000年以上の歴史をもつ古都である。この町がシルクロードの開通に大きく貢献したのは、前漢の武帝の元狩4年（前119）で、大月氏国に派遣された張騫^{ちやうけん}は、19年後、烏孫国の使者を伴って蘭州に帰着したのである。初めてシルクロードが開通した瞬間だった。以後、蘭州を門戸として、絹織物や陶器、また、井戸掘り技術などが西方に伝わり、ペルシアやガンダーラの文物や仏教が中国に伝来した玄関口なのである。

ところで、蘭州から黄河の劉家峡^{りゅうかきょう}ダムを船で上流に遡ること2時間余、神秘的で雄大な風光が続く。奇峰が林立していると思ったら、急に曲折した平原に出たりして、やがて、積石山^{せきせきざん}の峡谷を切り崩して建立された炳靈寺石窟^{へいれいじ}に到着する。

炳靈とはチベット語で「千仏、万仏」の意である。



黄河上流の蘭州から劉家峡を上り、炳靈寺の船着き場に到着した

石窟に刻まれた仏や菩薩の生気に満ちた顔、また、躍動感あふれる塑像群が694体、泥塑82体、壁画は約900平方メートルにも及ぶ。まさに黄河の源の一大仏教拠点である。

唐の貞元19年(803)に、涼州の権力者であり富豪であった薄承祧が寄進した高さ27メートルの並脚倚坐した大仏は王卷である。重層楼閣は今は歳月の経過とともに朽ち果て失われてしまったが、唐代には絢爛豪華な壁画や塑像が黄河に映えるさまは、まさに深山幽谷の桃源郷を思わせたことであろう。

ところで、2004年晩秋、私は炳靈寺の断崖の木製の粗末な細い梯子の階段を百段ほど登り、地上から30メートル余、大仏の頭上に立った。その壁面に穿たれた169窟には、インドに向かう法頭のサインが、今も墨痕あざやかに残っていた。その側には、維摩詰が病床にあっても、なお客人と仏法対話を展開している姿を描いた精巧な壁画もある。顔料にアフガニスタン産の高価なラピスラズリを使用しているので、壁面の文様は今も緑青色に美しく輝いていた。

思えば、私のシルクロードの旅は、夢とロマンの道ばかりではなかった。トルファンやクチャではウイグル族の盗人に追われ、敦煌では、深さ6メートルの堅穴に落下し大ケガをした。また、カザフスタンと新疆ウイグル自治区の国境で拉致され、約3時間半、小屋に閉じ込められた。3人の若い男性に囲まれ、すべて金品をまきあげられ、殺害される寸前までいったこともあった。

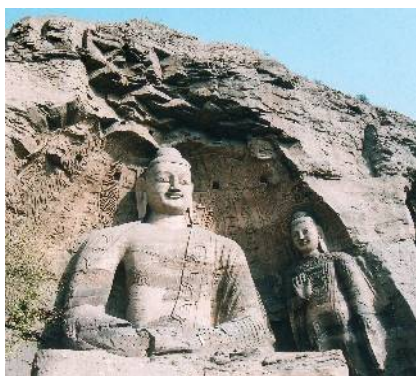
そうした中にあって、忘れられない出来事がある。それは、炳靈寺の大仏の頭上に石刻された釈迦苦行像を見た時のことである。苦行像は、中央アジアの各地にあるが、みな眼光鋭く、人を近づけない威厳がある。しかし苦行像は、肋骨と皮膚だけになっても、口元や目に笑みをたたえ、「苦もまた楽し」と思わせるような崇高さの中にやさしさを漂わせていた。慈愛に満ちた塑像に感嘆し、私は無意識のうちに引き寄せられて苦行像の前に立ち、写真を一枚撮った。しばらくして、もとの大仏の頭の上まで戻ったが、振り返って背筋が寒くなった。私が乗った足場の板は、断崖の岩肌に一辺が5～6センチの細い杭を数本打ち込んだだけのもの、その杭も長い歳月を経て朽ち果てようとしていた。落下せずによくも私の70キロに及ぶ体重を支えられたものだ、今でも不思議に思っている。私にはまだ今世でやらなければならない使命があるので、落下し即死することを免れたのだとも思った。まさに釈迦苦行像の一枚の写真は、私にとって命がけの作品となった。

大同の雲崗石窟は美の宝庫

私はブータンやバングラディシュ、またインドやスリランカや中央アジア諸国の石窟寺院を調査してきた。その中で最も、異彩を放ち独歩した塑像に出会ったのは、2000年3月のことであった。

「雲崗寺」と題する古詩に、「層楼突出し、神工を仰げば、翠嶺若く峴しく半空に出ず」とあるが、まさにこの詩作品に描写された以上に壮大な仏教寺院であった。

雲崗は、北魏の文成帝が曇曜^{どんよう}に命じて大同^{かいさく}に開鑿させた大小50ほどの石窟寺院で、北魏王朝の都の平城（山西省大同市）の西郊16キロに穿たれている。歴代の皇帝の姿をかたどったとされる曇曜5窟は、西暦465年に完成、気魄に満ち芸術性に富んでいた。往時の雲崗石窟の前庭には、堂舎や仏殿や僧院が多数あったと思われる。その証が、出土した柱の土台の石積み、屋根を葺いた緑釉瓦^{ふりよくゆう}の破片、そして顔料の付着した割れた絵皿や陶磁器の数々である。また、山腹には柱をはめ込んだ穴が数多く見られるところから、昔は前面を絢爛たる木造建築が覆^{おお}って、直射日光を遮る庇となっていたことも分かる。



第20窟の大仏は、高さ13.4m、曇曜5窟の一つである

雲崗石窟を造営した北魏（386～534）は、鮮卑族^{せんび}の拓跋氏^{たく}によって建てられた国である。398年、平城（大同）に都を置き、質実剛健な気風のもと国力を増強、439年には涼州（武威）を都とした北涼王朝をも滅ぼし、華北をほぼ統一した。その折、北涼の気鋭の彫り師の多くを北魏の平城（現在の大同）に引き連れてきて石刻させているので、雲崗石窟は涼州様式と呼ばれている。

初期の北魏王朝は、大乘仏教を深く信奉していた。ところが、446年、3代皇帝の太武帝は、漢人の崔浩^{さいこう}の提議を受け、道教を篤く信仰し、やがて国教とした。仏教は大弾圧を受け、仏寺や仏塔は焼き払われた。太武帝は晩年病に伏した折、その原因を廃仏のせいだと悔やみ、道士の崔浩を殺した。

次の皇帝の文成帝が即位すると、仏教は復興して雲崗石窟が造営され、インドのアジャンター石窟、アフガニスタンのバーミヤンと並んで、世界の三大仏教石窟といわれるようになった。

雲崗石窟の造営は、494年の洛陽への遷都をもって一応途絶えるが、その後も小規模な石室が住民の手によって造り続けられていた。雲崗で働く職人たちは、ただ金で雇われたというだけでなく、一人ひとりが仏教への燃えるがごとき情熱を持っていたのではないと思う。各窟を装飾する蓮華文や忍冬文、花綵文などをよく見てみると、高度な仏教美学によって支えられており、中には音楽の素晴らしさを描いた精緻な手法の伎楽天図もある。工人は石壁に向かって彫る一刀一刻ごとに、仏教の偉大さを後世に残し伝えずにはおくれものかという息吹と闘魂が作品ににじみ出ている。それ故に、「源遠流長」の法理の如く、千



第12窟の14種類の楽器を演奏する伎楽天

年の歳月が流れても、時空を超えて参観する人を感動させるのだと思う。

漢の正統文化が脈動する涼州（武威）

黄河上流を渡り、蘭州から西北に 280 キロほど進むと、左手に 6000 メートルを超える万年雪をたたえた祁連山脈、右手に小石や砂利がどこまでも続くゴビ、その間を曲がりくねった廊下のように径は続く。黄河の西の回廊のようになっているところから、河西回廊と呼び、そこには大きなオアシスが4つあるので、河西四郡ともいう。河西回廊の最初のオアシスが涼州である。気候が寒冷であるために、この名が付けられたという。王翰の「葡萄の美酒 夜光の杯」、王之渙の「黄河遠く上る白雲の間」といった唐詩があるが、これらの詩題はみな「涼州詞」である。

涼州はまたの名を武威という。前 111 年、前漢の武帝の威光がこの地まで及んだことから、この名が付けられたと言われる。さらに、5 世紀から 6 世紀にかけては姑藏と呼ばれ、北涼や後涼王朝の都となっている。



涼州の雷台出土の銅奔馬「馬踏飛燕」

『晋書』によれば、漢末から三国時代の動乱期にあつて、漢王朝 400 年の正統的文化を受け継いだ長安や洛陽の知識人たちが数千人が、「中州乱ると雖もこの方安全」として、治安が安定した楽土であるとしてこの涼州に移住したという。

市内に雷台という雷神を祀った 2000 年前の漢代の廟がある。1969 年、その地下からレンガ製の大型墳墓が発見され、副葬品として、精巧なミニチュアの人物 45 体、車 14 両、馬 39 頭、牛 1 頭が出土した。燕を踏みつけているので「馬踏飛燕」とか、伝説上の大空を疾駆する龍雀を踏みつけているので「馬踏龍雀」と呼ばれ、馬が天空に身を躍らせ走駆する最高傑作で、今では国家旅游局のシンボルマークに採用されている。

ところで、唐の辺塞詩人の岑参は、天宝 10 年（751）に涼州を訪れた時、「涼州七里 十万の家」と詠んでいる。誇張表現はあるものの、約 10 万人の住民を養うには、大変な経済力がある。しかし、この町は麦などの穀物が多量に生産されることから、「金の張掖、銀の武威」とたたえられていた。灌漑によって大規模な農業が営まれ、祁連山脈の雪どけの水を利用し、牛や馬や羊の放牧も盛んであった。隋・唐の時代には一大穀倉地帯となり、そのため東西文化交流の要衝の町となっていた。

前秦の將軍の呂光は、西暦 385 年、龜茲国から長安に凱旋する途中、この涼州まで来たところ、長安から来た前秦の使者の報告によって、王朝は既に滅亡し、皇帝の苻堅も死んだことを知る。帰るべき祖

国を失った呂光は、涼州にとどまって後涼^{ごりょう}王朝を建国したのである。

呂光に同行していた鳩摩羅什も、この政変により17年間にわたって、この町に住むことになる。幸いにも河西回廊^{かさいかいろう}は比較的平穏な時期であったため、心おきなく仏典や漢籍の学習に精励することができた。中国本土から僧肇をはじめ、多くの秀才が駆けつけ門下となり、言語だけでなく、漢族の習性、生活様



鳩摩羅什の死後、その舌が納められているといわれる涼州の羅什寺塔

式、さらに漢民族が「詩」という短詩型を好むことを知ることができたことは大きな成果であった。後の「意識」といわれる仏典漢訳の基盤は、この涼州にあったといえる。今も町には、世紀の偉人が住んでいたことを称えて、火葬にされたが焼けずに残った鳩摩羅什の舌が祀られ、八角12層、高さ32メートルの羅什寺塔が聳えている。

このように、人の一生はまことに不思議なもので、鳩摩羅什の長安での偉大なる訳経の成果は、実はこの涼州での研鑽の中にあったといえる。もしも順調に長安に入城していたならば、その名を歴史にとどめることはできなかったし、日本仏教も大きく変質していたと思う。たとえば、法華経の漢訳は今は鳩摩羅什訳が盛行しており、玄奘は、鳩摩羅什訳は完璧であり手を加える必要は全くないとして、自らは翻訳しなかった。もしも鳩摩羅什が出現していなかったら、後の世に玄奘訳の法華経が読誦されていたことであろう。

流沙に眠る孤城、カラホト（黒水城）

チベット系のタングート族の築いた西夏の正式な国号は「大夏」で、都は興慶府（銀川）である。副都とも第二の都ともいわれるカラホト（黒水城）は、中国の北西部、海拔870メートル、祁連山脈^{きれん}に水源をもつ黒河（エチナ河）の下流の、二つの河床に挟まれた台地の上にある。11～13世紀、黒水城は東西およそ440メートル、南北370メートル、高さ9メートルの城壁に囲まれていた。城内の西半分は寺院や役所、東半分が庶民街で、今でも石臼や陶片、布靴や銅銭や絹が流沙の中から頭をのぞかせていた。

カラホトが世界から注目されたのは1908年4月、ロシアの探検隊コズロフが、城内より西夏文字^{せいしか}で書写された仏典や漢籍など6000点の資料を発見したことによる。中には1190年に完成した西夏語と漢語の対訳辞書『番漢合時掌中玉』（骨勒茂才編）は西夏語解読のための重要な資料となっている。また「勝三世明王曼荼羅図」は、現在はロシアのレニングラードのエルミタージュ美術館に収められている。そ

の他、コズロフは多くの仏像・経典・仏画・陶器・貨幣を発見した。

『宋史』^{かこく}夏国伝によれば、西夏国は中国やチベットから手に入れた仏典を、新しく創った文字である西夏語に翻訳していたという。縦書きで右から左へ書く西夏文字は、漢字を参考にして作られ、漢訳経典やチベット語訳経典から西夏語に翻訳された仏教経典が多く出土している。なお、西夏の仏典は大乗仏教の経巻が多くを占め、中にはインドからネパールのカトマンズを経て、チベットのラ薩から青海省の西寧を経由して、銀川や黒水城に伝えられた密教系の経典もある。

20 世紀に入り、東洋学者のモリスは、^{ようしん}姚秦三蔵法師鳩摩羅什漢訳」と明記された法華経の、西夏語で注記し



黒水城内に散乱している石白

たものを手に入れ、漢訳本と対照して西夏文字の解説を試みている。その後、カラホトには、イギリスのス

タインが入り、また城内からかなりの量の文書を発見、その中に、西夏文字の傍らにチベット文字で注音した断片もあった。こうした注記は、後の西夏文字の解説のための大きな糸口になっている。

ところで、カラホトの滅亡の主たる原因は三つある。一つは、明代に入り航海術の発展により、海のシルクロードが隆盛をさわめるにしたがって、相対的に陸路の役割が減少していったこと。イスラム教の流入による政治的不安定は、しだいにキャラバン^{きょえんたく}の自由往来を妨げる結果となった。遊牧民族の略奪も相次ぎ、ステップ路とオアシス路の中間に位置しているカラホト経由の交易路はまたたく間に衰退していった。今ではそのコースも砂塵に埋もれてわからなくなり、ただ遺跡の点在しか残っていない。



黒水城内から見たチベット式の仏塔群

いま一つの要因は、地球の自然変動である。西暦 1400 年前後から始まった小氷河期は、カラホト一帯に寒冷化をもたらした。かつては、祁連山脈の雪解け水は、黒河に滔滔として流れ入り、カラホトの近くには居延沢という大きい湖も出現させた。ところが、寒冷化によって天山や祁連の山脈は凍りつき、氷河から流れる水量はわずかになった。次第に黒河は枯渇し、水の流れはカラホトまで到達しなくなったのである。

そのため穀物も育たず、家畜に与える牧草もなくなり、住民は四散し、15 世紀には忽然と砂漠の中に消えていった。

三つ目は、1209 年にモンゴルの大軍がカラホトを攻撃、西夏軍は善戦したもののエチナ川の流れをせ

き止められ、王城は水枯れになってしまった。また武器も底をつきやがて落城、カラホトの王は最後の決戦を挑む時、妻子を自らの手で殺し、巨万の財宝を井戸の中に投げ込み、地中深く埋めてしまったという。1227年、西夏王国はチンギス・ハンの軍隊によって滅ぼされた。それまで草原での騎馬戦しか知らなかったモンゴル軍は、難攻不落の黒水城攻略戦によって城を攻める戦法を学び、万里の長城の突破や華北や河南の城攻めの時の勝利の淵源となっている。

思い返せば、私が銀川（興慶府）を出発し、ゴビをわたってカラホトを踏査したのは、2009年春のことであった。道なき道を10時間余走って、やっと辿り着いた黒水城内は古跡累々、静寂の中に横たわっていた。まず、朝日に染まるカラホトの仏塔を城外から撮影しようと、早朝、撮影場所を見定め、三脚を立て太陽が地平線に昇る瞬間をひたすら待った。そして、とうとうその一瞬の輝きをシャッターにとらえることができた。陽光は七色に輝き、やさしく孤城をつつみ、林立する仏塔は虚空に聳えていた。私はその瞬間、時空を超えて、カラホトに住む西夏の人々と駆け合った思いがした。

敦煌の莫高窟は仏教文化の一大拠点

大きく輝ける町、敦煌（沙州）は、前漢の武帝（劉 徹）が、前111年に西域経営の前進基地として設置したことに始まる。初めは軍事基地であったが、シルクロードに平和が訪れると、東西文化交流の要衝であったことから、中国やインドや中央アジアの宗教や文化が融合しあったオアシスとして、町はたえず2000人を超える旅人で賑わっていた。

敦煌の西北約100キロに、漢代の二大関所の一つ
ぎよくもんかん 玉門関がある。私は東西24メートル、南北26メートル、高さ約9メートルの城壁によじ登った。壁上から西方を遠望すると、漢代の長城が、楼蘭の方面に細長く続いているのがよくわかった。唐朝の辺塞詩、
「春風度わたらず玉門関」（王之渙おうしかん）・「孤城遥かに望む玉門関」（黄庭堅こうていけん）等々の詩句が脳裏をよぎる。



敦煌の鳴沙山と月牙泉の夕暮れ

385年3月、前秦の呂光軍に従った鳩摩羅什は、龜茲を出発してから東の長安を目指し、敦煌へは同年6、7月頃に到着したと思われる。おりしも経巻を満載した最愛の白馬が死んだので、その供養のために建立した白馬塔は、9層からなり高さは12メートル、直径は7メートルもあった。



莫高窟千仏洞の大仏殿

この敦煌には、^{ばっこうくつ}莫高窟・^{ゆりんくつ}榆林窟・西千仏洞など8カ所の石窟があるが、規模が大きく造営期間が長かったのが莫高窟である。「莫」は「漠」のことで、砂漠の高いところにある窟の意である。このオアシスの断崖に築かれた石窟寺院の壁画の総面積は45000平方メートル、縦幅1メートルにすると横に並べれば45キロメートルの長さになる。洞窟は、敦煌の東南25キロ、鳴沙山の東の岸壁にあり、全長1680メートル、唐代には1000余窟あったと碑文に刻んである。現在は492窟が残存し、約2400体の塑像がある。

「^{さしゅうどきょう}沙州土鏡」によると、353年、地元の信徒によって第1窟が造営されたとあり、李氏碑文では366年、^{らくそん}楽尊という人物が最初に石室を彫ったという。以来、元代の1357

年に至るまで

の約1000年余、この地に絢爛たる仏教文化の華が咲き競い、全国から参詣者が集まってきた。

窟内には、美しく舞う天女をはじめ、仏教で説く生命観や宇宙観を絵解きの形で表現した貴重な壁画が描かれていた。過去の形式や枠組みにとらわれない技

群の色彩感覚、どの壁画にも詩があり、哲学があり、求道があり、そして何よりも画師たちの暖かい芸術性



莫高窟の前庭より、三危山を望む。手前は造営に携わった中心者の塔墓

があった。卓越した塑像技術の中に、作者の深い精神性が脈動している。

敦煌研究院の常書鴻名誉院長は、無名の画工たちの敬虔な信仰心が偉業を成し遂げたとして、次のように記している。「敦煌の作品が、今日なおみずみずしいのは、画工たちが心で、魂で創作したからだと思います。心の底から生み出した創造的な力は、偽物ではありません。真の芸術作品は千数百年を過ぎたとして



莫高窟の造営にたずさわった技術職人たちの住居跡と言われる工人窟

も、人々に感動を与える力は衰えないのです。長い歳月を経過して、今日も影響力があるというのは、作品が強い生命力を持っているからです」と、また、敦煌研究院の段文傑前院長は、敦煌の芸術が民族を超えた芸術家による創造の成果だとして、「画師や画工の中には、漢族以外に于闐人、^{うてん} 龜茲人、^{きじ} 党項人、^{タングート}、そして天竺人がおります」と述懐している。まさに莫高窟の造営に携わった画工たちは、過去の形式や枠組みにとらわれることなく、自由な精神で我が生命に湧現した仏の世界を描いていたのである。

5世紀から8世紀が莫高窟の最盛期で、窟と窟の間は、精緻な彩色の栈道で連結されていた。前庭には寺院仏閣が薈を並べ、この地を訪れた人々は、悠久の天地に思いを馳せ、平和の尊さと生命の尊厳を心に抱き、決意も新たに仏法実践を誓ったことであろう。

思い返せば、私が初めて砂漠の大画廊、敦煌を踏査したのはちょうど40年前だった。以来、この町に流れる精神風土の重層さに心うたれ、「敦煌出土李白詩」・「沙州敦煌二十詠」・「張議潮変文の研究」・「敦煌出土女人百歳篇」・「敦煌出土秦婦吟」・「敦煌出土大目健連変文」等々の論文を発表してきた⁴。



敦煌郊外にある漢代の関所、小方盤城の一座の玉門関



敦煌から西城南道に行く時に通る陽関の関所跡

敦煌は異民族が雑居しつつも、共に大乘仏教を中心に団結し、5世紀末までには、住民の約8割までが仏教に帰依している。その証拠の一つが、モンゴル帝国イルハン朝の西寧王スライマーンの時代、元の至正8年(1348)5月15日の日付のある「ああ、蓮華の如き宝珠よ」と書かれている碑文である。その上部には、漢字で「莫高窟」と大きく右から左に刻まれ、その下にサンスクリット、チベット

文字、ウィグル文字、パスパ文字、西夏文字、漢字で刻まれている。また、中央には観音菩薩が刻画されている。

⁴ 莫高窟から出土した「敦煌二十詠」をわが国で最初に紹介したのは、神田喜一郎博士である。昭和19年『史林』第24巻第4号に於いてである。私は神田博士が提示された20首の五言律詩を、日本人として初めて全注釈した。『唐代文学の研究』(山田勝久著、笠間書院、唐代の西域文学 — 敦煌の二十詠の世界 — 215～261ページ参照)

光緒 26 年 5 月 26 日 (1900) に、莫高窟の第 16 窟より多くの文学作品が出土した。大暦 11 年 (775) 前後に作られた「沙州敦煌二十詠」⁴の「莫高窟詠」である。そこには、この地の素晴らしさを「雪嶺 清漠^{おか}を干し、雲楼 碧空に架す。重ねて開く千仏の刹、旁出せり四天堂。瑞鳥 珠影を含み、靈花^{くんじょう} 薰^{くん} 囊^{じょう}を吐く。心を洗いて勝境に遊び、此れ従り塵蒙を去れり」と詠んでいる。しかし、町の繁栄も 8 世紀頃から滅亡の兆しが始まった。人口約 2 万人のうち、僧尼が 1000 人余も出現してしまったのだ。何の生産もしない出家者は、純朴な砂漠の住民から布施や供養を要求しつづけたのである。



鳴沙山の麓に行くラクダ隊

出土文書は、敦煌仏教の滅亡はイスラムの流入ではなく、内部からの崩壊、すなわち、僧侶の腐敗と墮落であった。敦煌の住民の心を仏教から離叛させてしまったようすを、歴史の証言者の如く出土文書は綴っている。唐代中期には繁栄を極めた敦煌もしいにその活力を失い、無名の画工たちの燃えるような信仰心によって築かれた歴史の町も、15 世紀には廃墟となり流沙の中に埋もれてしまった。

仏教遺跡の宝庫、トルファンの興亡

往古、シルクロードでは南下する北方遊牧騎馬民族と、西域に進出しようとする漢民族との激戦が幾たびか展開された。この民族興亡の舞台の一つがトルファン (吐魯番) 盆地である。

この地には交河^{こうが}・高昌^{こうしょう}の 2 城があり、その昔、車師国^{しゃしこく}や高昌国が栄えた。また、六朝から唐初期に



トルファンの街で見かけた老人とロバ車



仏教が幅広く民衆に流布し、ヤルホト千仏洞やトヨク千仏洞、ベゼクリク千仏洞などの約 50 の寺院、石窟を造営した。

ベゼクリク千仏洞は高昌国の王族の寺院で、83 窟のうち 57 窟が現存している。559 年書写の鳩摩羅什訳の法華経普門品の写本が出土した

孫悟空で有名な^{かえんざん}火焰山を見ながらトルファンに入ると、ブドウ棚に囲まれた白壁の家々が現れる。ブドウを棚に吊るせば、1週間で美しい緑の干しブドウができるという。海外にも輸出されている。

トルファンでは、日常は左から右へ書くブラーフミー文字系統のトカラ語B（クチャ語）が使われている。トカラ語は中国の天山南路で広く使用されていた言語で、インド・ヨーロッパ語の中で、最も東の地域で用いられていた。



アスターナ古墳出土の高昌国時代の婦人俑

トルファン地域の特徴は乾燥、熱い、強風、低地である。また、年間降水量は15ミリ、湿度は3パーセントというすさまじさである。気温48度、地表温度は82度まで上がったことがある。このような地域にあっては、水は生命と同義語である。ウィグル人は水を「SU」と発音するが、これはウィグル語の「血」の発音とほぼ同じ。中国語では「蘇」の字を使うが、「復活、死から脱出する」を意味している。

トルファンの住民は、「カレーズ」と呼ばれる地下水路によって耕地を灌漑し、米・小麦・綿・果物などを作っている。地表では蒸発量が多く、また、塩分を含んでしまうため農耕に使えない。人工地下水路のカレーズのみが、良質の水を得る唯一の有効な方法なのである。

私は、よく年末から正月にかけてトルファンを訪れることにしている。大晦日の夕刻、トルファン博物館の柳^{りゅうこうりょう}洪亮館長の招きで職員の忘年

会に出席した。宴たけなわになると、老若男女みな博物館のロビーで踊り始める。私も一緒に踊る羽目になり、交流の輪は時を忘れて深夜まで及んだ。

1980年代のことである。トルファン一帯に大雨が降って、ムルトゥク河の水位が上がり、ベゼクリク千仏洞の窟内に河水が流れ込んでいた。水が引いたあと窟内は泥土に覆われてしまったので、管理者が清掃していた時、1つの陶瓶の頭部が泥土の中から突き出ているのに気付いた。窟内に入ってきた濁流によって地表の土砂がめくり取られ、地中に埋められていた埋^{まいきょう}経が出てきたのである。引っ張り出してみると、中には鳩摩羅什が長安で406年に漢訳した「妙法蓮華経」観世音菩薩普門品第25が逆さに入っていた。瓶の底に水が入っており、そのため巻頭の部分が消えて、上部の2文字が3文字はすべて濡れて見えなくなっていた。末尾に建昌5年8月15日に写経されたことと、書写した人物が比丘義導であることも明記されていた。これは長安でサンスクリットから漢語訳された写本が、遠く西方のト



4世紀に造営されたトルファンのヤール湖千仏洞

ルフアンにまで西還したことを物語っている。

私は法華経普門品を見たいと館長にお願いした。しかし、国家の一級文物であるので、旧知の間柄でも、簡単に倉庫から出してくれない。年末から年始にかけて毎日お願いし、やっと見せてもらったが、撮影は禁止。諦め切れずに博物館に心を込めて日参したところ、1週間ほど過ぎたころ「所定の手続きを取り、シャッター1回、1枚だけ撮影可」との許可を得た。私は勇躍歓喜し、三脚を立てて恐る恐るシャッターを切ったことを、今でも鮮明に覚えている。

ところで、トルファンという名は、元代より以後の呼び名で、「トル」はウィグル語で「のろし台」、「ファン」は「城・住めるところ」の意である。はじめは土乱翻と表記していたが、これは「濛々とほ



交河故城の破壊された仏塔には、わずかに菩薩像の身体の一部が残っていた

こりが立ち上がっているところ」の意味で、侮辱する表現であったため吐魯番と改められた。

古来、アーリア系の遊牧民を中心に、多くの人々がこのトルファン盆地に集まった。その理由は土地が豊かで、経済と政治が安定していたためであった。『魏書』には「気温が高く、土地は肥えて二毛作であり、養蚕や果実

に適し人口も多い・・・灌溉水路があり、蜜も塩もとれ、ブドウ酒を産出する」とある。

唐王朝は、トルファンの東45キロにある高昌^{こうしょう}国を滅ぼし、名を西州と改めた。640年から658年までは、西域での唐の最高軍政機関である安西^{あんせい}都護府^{とごふ}を設置、王城は周囲約5キロの城壁に囲まれている。『旧唐書』によれば、敦煌の二倍以上の人口、5万人余を数えることができる。

トルファンでは仏教文化が咲き薫り、4世紀から7世紀にかけて、ベゼクリク千仏洞^{しょうきんこう}、勝金口千仏洞^{とよくこう}、吐峪沟千仏洞^{きく}などの石窟が造営された。とくに、麹氏高昌国時代には大乘仏教が興隆し、トルファン文書には300余寺の名称を見ることができる。こうした政治の安定や経済の発展は民衆の生活を豊かにし、近隣のオアシスにもその様子は伝わっていく。敦煌から逃亡してきた人物を、敦煌太守が「送り返して欲しい」と認めた手紙まで発見されている。

ところで、トルファンのヤール湖千仏洞は、早期の土着民族である塞族^{さい}の子孫が創建した

トルファンのヤール湖千仏洞の4号窟の壁画



石窟である。塞族は前3世紀頃からは車師しゃしと呼ばれ、『史記』や、『漢書』には「王は交河城こうがで政治をとっており、河が分かれて城の下をめぐっているので、交河というのである」と記している。

漢代の車師国の王城である交河城は、トルファン市の西10キロほどのところにある。二道溝と三道溝という2つの河の交わる台地の上にあり、南北1600メートル、東西約300メートル、前漢時代には、約700戸の家が建ち並び、崖上の城内の人口は6050、兵数は1865人であった。この頃の車師の文化の高さを示すものとして、1996年9月、交河城の河川を挟んだ西の墓地から、早稲田大学の長澤和俊名誉教授を団長とする探査隊が、黄金のラクダや虎の装飾品、重さ77.3グラムの黄金の首輪などを発見している。

327年、前涼の張駿ちょうしゅんはトルファンを支配下に収め、高昌壁に政治の中心を移した。しかしその後も、交河城は文化と伝統を反映した仏教拠点として発展している。

5～8世紀頃の交河城の住民の多くは仏教徒であり、その祈りの場所として、ヤール湖千仏洞を造営している。千仏洞はトルファン市の西方、約11キロのヤルコ村に位置し、交河故城北端からは、北西に約1600メートルの距離にある。

窟の入口に近い上部には、昔は堅固な日除けがあったらしく、一辺が8～10センチの四角い孔あなが6個、直径15センチほどの丸い孔が7個あいていた。さらにそのすぐ上には、小さい孔が平行に82個あいていて、創設当時は精緻な木製の彩色を施した庇が並んでいたことが分かる。なお、この千仏洞の東西の長さは、約65メートル、現存する窟は7窟である。最も古い石窟は第1窟で、群青色や赤色系の顔料を使って、花の絵が天井一面に描かれている。左右の壁には茶系統の顔料を多用した千仏画がぎっしりと描かれている。

ところで、ヤール湖千仏洞は、中央アジアにおける石窟寺院の建立の条件、すなわち、岸壁の素地が堅く草泥が塗りやすい。風にさえぎられて画の保存に恵まれていること、また直射日光が入らず、静寂閑雅にして風光明媚な地域であること、集落の騒音から離れているものの、村との交流が容易で、修行者の衣食の充足が可能な範囲であること。そして、清涼な水の採取ができる河川か湖水が近くにあること、これらすべての条件に適った場所にヤール湖千仏洞は位置していた。

若干、内部を紹介すれば、4号窟は、千仏洞の中心窟で、奥行きは約18メートル、幅は4メートル余、高さは4.5メートルであった。6人の比丘ちようほうと、長袍ふげん もんじゅしりを身につけた高昌国時代のウィグル人の男女供養人像が描かれていた。側壁上部には、普賢と文殊師利の2仏が美しく描写され、天井には千仏が描かれている。また、ウィグル族の女人供養像も2体あった。門戸の東壁には赤色の漢文題記があり、「到此西谷寺」の文字が読みとれる。これは当時、この窟が交河城の西の谷にあったところから、西谷寺との名称が付けられていたことが分かる。

ヤール湖千仏洞が造営された年代は、壁画に描かれている供養人の髪型や服装、題記の言語、そして、

近辺から出土した經典の書写年代等を考え併せてみるに、車師前国の327年から440年頃と考えられる。その後、11世紀前後の回鶻^{ウイグル}高昌の時代、再び石窟が脚光を浴びたらしく、朽ち果てた壁画の上に白壁を塗り、さらにその上に別の仏教壁画を描いている。

ともあれ、ヤール湖千仏洞は、車師人の文化と伝統を色濃く残している仏教拠点といえる。私は、この千仏洞へは十数回訪問したが、いつも仏教壁画の素晴らしさに感嘆、特に第4窟の王室の説法図や縦向横幅垂帳紋の図案の美しさには心をとられる。また、石室から外に出て前庭から東方を眺めると、眼前に交河城が一望できる。その華麗さは筆舌に尽くしがたく、まさに塞外の江南を想起させるに十分であった。

輝ける楼蘭王国に立つ

楼蘭王国は、タクラマカンの果てしなき流沙の中の小さなオアシスにすぎない。しかし、この王国の歴史は古い。楼蘭が歴史に初めて登場したのは、紀元前176年、前漢の時代である。当時の人口は14100余人、地理的に東西交通路の重要な位置にあったことから、この地の支配をめぐる、たびたび漢^{きょうど}と匈奴の争奪戦がくり広げられた。

楼蘭が最も栄えたのは、出土する古文書の記録から類推すると、4世紀初めから中頃である。各国の使節や商人が往来し、国際色豊かで高度な文化が開花した。国王は篤く仏教を保護し、王妃はしばしば



楼蘭城の西の郊外、そこは荒涼とした砂漠地帯だった

西域南道の仏教王国、于闐の王女であった。

楼蘭の滅亡は5世紀末、住民は離散しオアシスは廃墟となっていく。その原因はいくつか考えられる⁵。まず第1は、水不足である。タリム川の先端の孔雀川の水が、王国の東に広がって

いたロプ・ノールまで届かなくなってしまったのだ。

第2の理由は、環境破壊である。住民は二毛作を始めて土壌を傷め、牛や羊やヤギを放牧し、草を根こそぎ食べさせてしまった。そのため土地に塩害が生じ、しだいに耕作ができなくなっていったのである。砂漠の真ただ中の中のアアシスであるので、ゴミの処理も困難であったようだ。

⁵ 93 頁を見よ。

また、死者を埋葬するごとに、墓標や棺桶を作るために、大切な胡楊の大樹を伐採し続けていた。貴顕の人の数体の遺骸を砂嵐から保護するために、150 本あまりの大木を伐り、円形の柵を築いている墳墓もあった。これは、死者を尊重するあまり、生きている者を苦しめるという結果になった。また、国民の3～5人に一人は出家者という異常な住民構成、すなわち全く生産活動に従事しない4000 人余の僧侶の出現も、楼蘭の経済を急速に破壊していった。

492 年以後、楼蘭は幻の王国として史書からその姿を消し、湖とともに蜃気楼のように消えてしまったのである。644 年、唐の玄奘は、楼蘭の支配地域だった^{ミーラン}米蘭を通過した時、「城郭はあれど人煙はなし」と『大唐西域記』に記述している。

2003 年2月3日、ウルムチ市登山協会（趙子允会長）のロブ・ノール探検隊は、イギリス人探検家オーレル・スタインが名付けた「LA」（楼蘭故城）地点の北東、土垣



楼蘭城内の仏塔は高さ 12m 余、1700 年の歳月を経て今なお虚空に聳えていた

遺址の高さ 15 メートル、長さ 50 メートル余の半島状の台地の穴から、美しい壁画と彩棺を発見した。2月10日付の朝刊紙「^{しんぼう}晨报」は、この発見を大きく報道し、中国国営・新華社通信は3月2日、「世紀の発見」と題して、全世界に楼蘭の地下墓室発見のニュースを発信した。1900 年3月28日、スウェーデンの探検家、スウェン・ヘディンの案内人の^{あえるどこ}艾爾得克が「LA」を発見してより 103 年、その間、一片の壁画も発見されていなかったのも、このニュースは史上初のことであった。私は当日、朝7時半のNHKのニュースで初めてこの内容を知り、すぐに旅装を整え楼蘭に向かい、日本人として最初に地下墓の壁画を調査することができた。帰国後、4月20日付の読売新聞夕刊の文化欄に「大量の原色壁画発見」と題して、二枚の墓室内の写真を入れて発表し、壁画の位置も、北緯40度39分、東経90度7分、海拔721メートルであると公表した。

壁画の内容は、イラン風の髯を生やし、グラスを持ったソグド商人の酒宴図や、仏教で用いる法輪のような円形の文様、そして、楼蘭の住民の放牧の様子を描いた動物咬合図であった。流暢で精緻な線条で遠い過去からの熱いメッセージを伝えていた。

ところで、楼蘭王国は滅亡しても、西域の代名詞となって多くの漢民族を魅了し続けている。たとえば、「都護 楼蘭に返し、將軍 ^{ゆしん}疏勒に帰る」とあるが、作者の^{ゆしん}庾信（515～581）の生存したこの時期、ローラン道はもう使用されておらず、疏勒（カシュガル）には、敦煌より哈密を経て金満城へ、そして亀茲を経て尉頭国を通って行くしかない。もう一本の道は陽関より米蘭へ、そして于闐から莎車を経て疏

勒に通ずる道である。故にこの詩を正確に、史書の記述として読めば、前半は王国はもう存在しないのだから虚構であり、後半は真実（事実）のようであるが、庾信の生きていた梁から陳の時代、遠く疏勒まで將軍が遠征することはなかった。故にここでは、あくまでも文学的イメージとしての楼蘭であるといつてよい。

隋代に入ると師均衡（540～609）の詩中に、「楼蘭」の詠出が見える。師均衡は山西省榮河県の人で、北齊・北周に仕え、隋の文帝の時、内史侍郎、上開府となったが、煬帝^{ようだい}に嫌われ殺された。その作品「出塞」^{ふかいし}は、傅介子の故事をふまえ、遊俠的壯士の姿を描くかのごとく、「辛苦して楼蘭を刺す」と歌っている。



敦煌から楼蘭への道にある胡楊の一里塚

る。

傅介子については、『前漢書』傅介子伝に、漢の使者が西域諸国に向かう途中、楼蘭の親匈奴よりの国王安帰^{あんき}により、たびたび苦しめられた。そのため皇帝は前77年、傅介子を派遣し奸計を用いて楼蘭王を殺害させた。その後、漢に降っていた弟の尉屠耆^{いと き}を新しい王に任命した。漢からの贈り物をすると偽って、楼蘭王安帰を少ない

人数で殺した傅介子は、その功により義陽侯に封ぜられ、青史に名を列することとなった。また、王を後ろから刺した部下は、皆侍郎に昇進している。

思えば、2900人余もいる楼蘭兵のたった中、わずかの兵で大きな成果を上げたこの勇気ある行動は、楼蘭滅亡後も中原の人々に語り伝えられていった。漢代に形成の萌芽をもつ中華思想は、その主流の一つである漢民族優越の考えとともに、文学的には漢の武帝朝に国民に浸透し、六朝時代にほぼ外形が成り、唐朝に於いて成熟したといつてよい。

言うまでもなく、の漢民族を中心とした歴代王朝は、たえず塞外異民族の侵入に悩まされてきた。そうした中であって傅介子の一陣の爽風の如き活躍は、漢民族の心いつまでも生き続けるのであった。

後漢の班超^{はんちょう}の場合は、たしかに36人でカシュガルに遠征し、長期間にわたって平和を保ったが、あまりにも少数民族に支持されすぎ、漢族の立場から見れば、漢民族の主体性が薄らぎ、現地に埋没したように感じられる。それに対して傅介子は、頭脳と武力を使つての智勇兼備の行動として、文学の世



敦煌の西方に続く漢代の万里の長城。私たちはこの長城に沿って楼蘭に向かった

界、なかんずく漢詩の分野に表出してくる。

なお、シルクロードを代表する詩語として、楼蘭、天山、蒲海、祁連、崑崙、熱海、葱河、胡天、駱駝、征戍、胡笳^{こか}、出塞、入塞、胡雁、絶域、胡琴、塞砂、单于、胡騎、紅柳、胡風、鉄関、蒲昌、火山、胡兒、蕃軍、平沙、戍楼、黄沙、胡瓶、塞馬、塞沙、都尉、都護、絶漠^{きょうてき}、羌笛、瀚海、楊柳、琵琶、西戍、沙場、青海、胡虜、烏孫、葡萄酒、月氏、匈奴、商胡、胡旋、西域、胡天、赤亭、戍王、蕃騎、塞下、塞外、大漠、戍鼓、穹廬、葡萄、辺庭などがある。

そうした中であって多くの町や川や山は、時の推移変転とともに消えていったが、「楼蘭」だけは、時代や空間を超えて歌い継がれている。その理由は、歴史的には 4000 年の歴史を有し、文化的には東西文化の架橋の役目を果たしたからである。さらに、仏教や宝玉の東伝に大きな役割を担った王国だったからである。そして、なによりも漢民族の優越思想を刺激し、心地よいロマンを胸中に惹起させるにふさわしい、漢土と西域をつなぐ王国であったので、栄達と郷愁の念を涌现し、交叉させつつ詩人たちに継承されていったのである。

思えば、中国の長い歴史であって、一度たりとも楼蘭王国の軍隊が中国に攻め来ったことはない。それに対して中国は、漢代より 600 年の長きにわたって、たびたび楼蘭に侵攻し、国王を斬殺し、住民を苦しめてきた。そして、楼蘭が滅亡したあとも、今度は詩篇に於いて攻撃し、侵略し、殺戮している。中華思想から見れば、あくまでも楼蘭は西戍、胡虜の地なのであり、国威の発揚における攻め滅ぼすべき対象なのであった。故に、前 110 年、700 余の輕騎兵で楼蘭を侵略した趙破奴^{ちょうははど}や、前 77 年に楼蘭王を殺した傅介子は、まぎれもなく漢族の英雄としての気概を後世に語り伝えるべき人物であったといえよう。



楼蘭は廃墟となった町で、途中には旅館は 1 軒もない。テントで野営する日が続いた

ところで、漢民族は好戦的とばかり言えず、古来、反戦平和の文学の流れが存在したことを述べねばなるまい。出征兵士が家族を思うさまを歌った詩は、春秋時代から数多く存在している。「父は曰はん嗟^いわ^あ予が子よ、行役して夙^{しゆく}夜^や已むこと無けん」(『詩経』魏風)、「白骨人の収むる無し」(『古詩源』企喻歌)などがある。唐代には無能な為政者に対して怒りを込めて「髑髏^{どくろ}は尽く是れ長^{そつ}城の卒、日暮沙場に飛びて

灰と作る」(常建)、「白骨の縦横 乱麻に似たり、幾年か桑梓龍沙に変ぜし」(元好問)、「或は十五従り北のかた河を防ぎ、便ち四〇に至るも西の方田を営む」(杜甫)、「黄昏塞北に人煙無く、鬼哭 啾 啾 とし て声天に沸く」(王翰)と、こうした辺境の悲惨さを写す詩篇を見ると、中国古典詩には勇戦督戦詩と、厭戦反戦詩の系譜のあることが分かる。そうした中であって「楼蘭」を歌詩に入れることは、前者、すなわち、英雄的壮志と深く連結している文学思潮といえる。

ところで、日本人で敦煌やトルファンを旅した人は数えきれないほどいるが、楼蘭まで行った人は稀である。そうした中、私は2003年3月、2004年3月、2006年3月の3回にわたって、楼蘭を本格的に調査した。

第1回目は、天山山脈の山麓にあるウルムチを経てトルファンに進み、そこで旅装を整え、楼蘭に向かって南下した。大型トラック1台、砂漠車6台、隊員は16名であった。

ドロ沼のような小径を進んだかと思うと、起伏に満ちた山道が続いていた。次いで、紅柳や胡楊の点在する樹林地帯をまる2日走行すると、急に50~60センチの段差のある固いデコボコ道、風化土堆群(ヤルダン)に入った。4日後、楼蘭から約30キロ離れた龍城に到着した。その後、さらに南下して古墳群の中にある楼蘭の地下墓の壁画に辿り着いた。

私は、楼蘭に近づく20キロメートルほど手前から、1キロから2キロおきぐらいに、高さ3メートルほどの土が盛られ、その上部に、1本の胡楊の老木があるのに気づいた。それは旅人を迎え入れるための一里塚で、今は水枯れによって朽ち果ててしまっているが、1700年の歳月を経てもなお、虚空に向かって咆哮しているようであった。野営を重ねてやっと到着した楼蘭は、幻の湖ロプ・ノールの西方、28キロに位置していた。

城内の調査を終えた日、コルラから来た少数民族のドライバーの一人は、高さ35センチ、壺口の直径20センチほどの陶器の水甕を持ってきた。楼蘭の郊外8キロほど行ったところに大きな仏教寺院があり、そこで見つけたという。寺院は半分ほど砂に埋まっていたが、白壁に描かれた等身大の美しい彩色の交脚菩薩の壁画も発見したという。まさに、楼蘭史を飾る新しい仏教寺院の発見である。私はいつの日にかこの寺院を、本格的に発掘調査したいと思った。

第2回目は、まず敦煌から玉門関に入り、そこから万里の長城の先端に沿って西に進み、白龍堆に入った。流沙と寒風に悩まされながら、野営すること4日、やっとのことで漢代の食糧倉庫といわれる方城に到着した。こ



楼蘭王国の支配地にあった精絶(ニヤ)遺跡から、1995年10月に発見された錦。「五星出東方利中国」(五星、東方より出て中国を利する)との文字が織られている

の間、苦勞して前進したものの突然、断崖に突き当たり、また引き返したりして、1日でたった12キロしか進めない日もあった。そうかと思うと、流沙千里というように、どこまでもなだらかな堅い砂漠の上を快走する日もあった。途中、タクラマカン砂漠で朽ち果てた1台のジープを見つけた。勇気をもってタクラマカン砂漠の横断を試みたらしく、白骨の死体はハンドルにしがみついていた。砂漠では、車で走行することは危険であることを改めて思い知らされた。

3回目は、敦煌から陽関を越えて、青海省の北部を西行し、アルトゥン山脈の北麓を走行した。隊員は20名、5台の砂漠車に分乗し、大型トラックにテントや食糧を山積しての旅だった。標高3648メートルの青新界山で、第1日目のテントを張った。

夜空には美しい春夜の明月が浮かび、雨ふるが如き星空を眺めての野営だった。ところが驚くことに、私たちが朝目を覚ましてみると、気温はマイナス8度、外は一面の雪化粧だった。テントは50センチほど雪で覆われていた。春3月上旬といっても、海拔3200メートルの山径は、氷の上に降雪があるので、タイヤは滑りやすい。

山岳地帯から平原に下ると突然、大型の砂嵐に遭遇することになってしまった。風速35メートル余、1メートル先も見えない。吹き付ける砂塵や噴石は、私たち一行を25時間も釘付けにした。車外に出ることもできない。伝え聞くとところによれば、1週間も吹き荒れた時もあるという。幸いにも一時的に砂嵐が収まり、雲間に青空がある瞬間を見計らって、やっと脱出した。

その後、凸凹の激しいヤルダンが続いたり、1メートル余はあると思われる段差を砂漠車で走った。しかし、とうとう私の乗った四輪駆動砂漠車のタイヤのビスが3本も折れてしまった。やっと補修したが、あまりの激しい振動のために、今度は後輪左のタイヤが吹き飛んでしまったのだ。私はタイヤが1本無くなったことも知らずに、3本のタイヤだけで200メートルほど走行して、やっと気がつくというありさまであった。

近年、墓泥棒や外国人の無断踏査隊が侵入するので、自治政府は楼蘭の壁画墓の近くに、2人の管理のための兵士を常駐させていた。鶏を飼い堅い饅頭を嚙って守護している姿は、まさに流刑地にいるようであった。管理する兵士は久しぶりに訪れた人間の顔を見て、懐かしげに歓迎してくれた。兵士を同乗させて地下墓や王城を参観したが、時々、車を止めては手で砂を払い1枚の板をよけていた。楼蘭の周りには、いたる所に侵入を防止するための処置を施したという。長さ2.5メートル、幅20センチ、厚さ2センチほどの板に五寸釘を打ち込み、それを上向きにして人の通りそうなところに、砂を2、3センチ被せて置いてあった。原始的ではあるが、最も効果的な侵入防止の処置である。釘が足を突き抜けたら、タクラマカン大砂漠の真っ只中で医院も無いので、場合によっては化膿して死に至ることも想定される。

振り返れば、私の人生にとって3度にわたる楼蘭調査は、想像を絶する苦難の旅であっただけに、生

涯忘れ得ぬ貴重な思い出となっている。

亀茲、偉大な訳経僧を生んだ歴史の町

天山山脈の南麓のオアシスであるクチャは、西域 36 カ国の一つである。当時のクチャ人の顔がキジル千仏洞に描写されているが、今住んでいるウィグル人とは全く別の民族であることが分かる。古代から唐代まではトカラ語を話した亀茲人がこの地に住んでいたが、7～8 世紀頃からウィグル族が天山山脈を越えて南下してきた。亀茲人は殺されたり、逃亡したりして歴史から消滅している。いうならば新疆ウィグル自治区のウィグル人は、タクラマカン砂漠の周辺の牧歌的な国々を攻め滅ぼした征服民族といえる。

ところで、古代亀茲国（クチャ）を語る時、忘れられないのは世紀の偉人と評される訳経僧の鳩摩羅什の存在である。鳩摩羅什は西暦 344 年、国王の白純の妹の^{ぎば}耆婆を母とし、西北インドからやってきた鳩摩^{くま}羅^ら炎^{えん}を父として生まれた。幼いころから神童と呼ばれ、7 歳にして出家、母に従って当時の仏教の中心地であった罽^{けい}賓^{ひん}国（ペシャワール）への修行の旅に出たのは、西暦 359 年、9 歳の時である。当時の仏教の中心地は、ガンダーラから罽賓に移っていた。亀茲から罽賓までの主たる道は 3 本あったが、母は鳩摩羅什がまだ 9 歳であることを思い、比較的 안전한 疏勒経路を選んだ。まず、亀茲から姑墨・温宿^{こぼく おんしゆく}を通り^{いとう}棋蘭（チラン）城を経て、尉頭国（トムシュク）のトクズサライ仏教寺院に入ったと思われる。

その後、疏勒に到着してからは東南に方向を変え、国境の町タシュクルガン（石頭城）でひとときの旅装を解いている。そこから西南に進み、パミール高原とカラコルム山脈の中間地点であるクンジェラブ峠を越えて、バス、グルミット、フンザに向かったと思われる。峠からフンザまで 160 キロあり、法華



鳩摩羅什が生まれたといわれる亀茲国のスバシ故城

経が出土したギルギットまでは 110 キロ、さらにインダス川沿いにチラスまで 130 キロ、タコットまでは 245 キロある。鳩摩羅什母子はこのコースを進んで罽賓国に入ったと推断される。

鳩摩羅什と同時代に生きた法

顕も天竺まで歩いて行った。西暦 399 年、60 歳を超える高齢でありながら、長安から渭水^{いすい}を渡り、咸陽^{かんよう}を経て鳳翔^{ほうしょう}に入り、その後、平涼^{かいいい}、会寧^{せいえん}、靖遠、蘭州に至って、炳靈寺を参観している。

法顕は長安にいた時から鳩摩羅什の名声を知っており、鳩摩羅什が涼州に滞在していることも当然分

かっていたはずである。ところが、どうしたことが蘭州から涼州へかけての主要ルートを進まず、敢えて鳩摩羅什と会うのを避けるかのように、祁連山脈の南麓の厳しい山岳ルートを通っている。破戒したという噂のある鳩摩羅什に接したくない気持ちがあったのかも知れない。

次いで、西寧^{せいねい}に行き、養楼山^{ようろう}を越えて張掖に入っている。その後、敦煌から玉門関を出て、ロブ・ノールの北岸から楼蘭に入り、孔雀川をさかのぼり、カラシャールに入った。そこで食糧を調達し、タリム川沿いに西行し、ホータン川に沿ってタクラマカン砂漠に突入、35日後に砂漠を脱出し于闐国に到っている。

その後、皮山から子合^{ひざん しごうこく}国（カルガク）に入り、葉爾羌^{イエルクワン}河をのぼり、タシュクルガンに入っている。羅什が9歳時に歩いた道と法頭のコースが合流するのは、今日の金湖楊^{きんこよう}である。以後、罽賓国までの道のりは、羅什と全く同じである。

さて、罽賓国に着いた鳩摩羅什は、国王の従弟の槃頭提多^{ばんとうだつた}に師事した。槃頭提多は、鳩摩羅什の神俊なることを認め、また罽賓国王も羅什に注目するようになった。ある時国王は、王宮にてバラモン^{げん}の論師と羅什との法論の場を設定した。バラモンは鳩摩羅什が年少であるのを見て、軽んじて不遜な態度で接し、『高僧伝』には、鳩摩羅什に論破されて、「愧慚して言無し」と記されている。

罽賓国での仏教を3年余で修得した鳩摩羅什は、12歳（361年）の時、母とともに亀茲国に帰ることになった。帰途、思うところがあってさらに修行のため1年間、疏勒に滞在することとした。

疏勒は、最果てのオアシスで、海拔1294メートル、町には葉爾羌^{イエルクワン}河など3本の大河が流れ、はやくも漢代から市場が開けていたと『漢書』は記している。鳩摩羅什が訪ねた頃の人口は約2万人、王城は、今日のハノイ故城と推定される。私がハノイ城を測量したところ、東西3.6キロ、南北1.5キロあり、城壁も東側が約80メートル残存、疏勒国の9つの支城を守る中心的な城であったことがわかる。この城より北へ約6キロ、カシュガル^{カシュガル}のモル仏塔は、往時の光輝を今に垣間見せてくれる。



クチャの北西約10kmにあるクズルガハ烽火台。約2000年前の前漢時代に外敵の侵入を知らせるために造られた

なお、2世紀から5世紀まで、疏勒国の支配下にあったのが、西域南道の莎車国（ヤルカンド）である。カラコルム山脈と崑崙山脈の雪解けの水によってオアシス農業が普及し、強力な国家を成立させていた。漢代には焉耆・疏勒・鄯善・于闐と並ぶタクラマカン周辺の五大強国の一つだった。しかし、王族の権力闘争が激しく、王子だった須利耶蘇摩^{スリヤソマ}は出家し、疏勒国に移り住んでいる。

13歳の時に亀茲国に帰り、大乘仏教を弘めるために総力をあげている。この時期、亀茲には寺院が数多く建立され、170人の僧侶の住む大寺、180人の尼の住む寺院などがあり、みな大乘仏教を流布しようとする鳩摩羅什に反対した。住民もアビダルマ、いわゆる小乗仏教を信奉していたので、帰国した鳩摩羅什が、大乘仏教を説くのに反発し、怨嫉^{おんしつ}する者も相当いた。法論しても勝てる見込みは全く無く、その様子を高僧伝には「能く之に抗^よするもの莫^なし」と記されている。亀茲の小乗仏教の僧侶たちは、鳩摩羅什のかつての老師匠をカシュミールから呼び寄せ、小乗への復帰を説得させたりしたが、法論のすえ、かえって師匠は鳩摩羅什の弟子となってしまった。

西暦382年、長安に都を置いた前秦王^{ふけん}の苻堅は、鳩摩羅什を手に入れるため、「賢哲は国の大宝なり」との詔勅を発し、呂光^{りょこう}を将軍として7万の軍を出発させ亀茲を討たせた。途中、遠征軍は、楼蘭や吐魯番や焉耆などの軍を加え、その数は10万余になった。たった一人の人材を呼び寄せるために、10万の軍が動いたという歴史的事実は、鳩摩羅什がいかに人材であったかを物語っている。

亀茲国の白純王^{こぼく}は姑墨や尉頭や疏勒など、西方の友好国からの援軍を期待して対戦した。また、平沙万里を渡ってきた呂光軍は疲れ果てているだろうと軽視し、鳩摩羅什の反対を無視して戦った結果、亀茲軍は壊滅し白純王は殺されてしまった。

亀茲を出発し長安に向かった鳩摩羅什は、17年間に及ぶ涼州留学のあと、西暦401年、57歳の冬に長安に入り、主要な仏典を、古代インド語のサンスクリットから漢語に翻訳した。一文一句たりとも仏の真意を違えぬという峻厳な気迫に満ちた訳経への日々だったであろう。鳩摩羅什の偉業は、やがて日本にも伝来し、鎌倉仏教の僧たちの依教とした仏典の多くは、鳩摩羅什訳であった。その正確な訳出の数々は、平安朝という絢爛たる文化の華を咲き競わせる思想的基盤となった。

1994年、キジル千仏洞の前庭に高さ3メートルの「若き日の鳩摩羅什像」が建立された。どうして1600年以上も前の人物の顔が分かったのかと現地の研究員に尋ねたところ、キジル千仏洞の中から4世紀頃の塑像が発見されたという。さらに、鳩摩羅什と同時代の人物を描いた窟内の壁画も参考にして、敦煌研究院が10年の歳月をかけてやっと設計図を完成し、杭州で鑄造したという。

2004年8月、私は発見されて間もない新疆ウィグル自治区のアアイ石窟を、わが国の研究者として最初に調査した⁶。石窟は敦煌から西に約1000キロ、クチャから北へ120キロ、天山山脈の奥地、赤い山と呼ばれるクズリヤ大峡谷の中にあつた。今から20年ほど前、ウィグル族の24歳の2人の牧人、アブレティとトルビーが、薬草を採取するため山中に入つたところ、高さ30メートルの断崖に大きな穴が空いているのに気付いた。断崖の上からロープで降りて石室を覗き込むや、驚きの声をあげたという。窟内の正面には塑像があり、周りは絢爛たる壁画で埋め尽くされていたからだ。しかし、仏像はイスラム

⁶ アアイ石窟の紹介については、私は日本経済新聞、2003年11月26日付「文化」欄において、「中国辺境 絢爛たる壁画」— 防備軍人の礼拝所クチャのアアイ石窟を調査 — と題して地図や写真も入れてその全容を発表した。

教徒の農民が砕いて肥料にしてしまったという。今は台座と仏教壁画だけが残っていた。腰をくねらせた艶麗な菩薩の姿も描かれており、参詣に来たアゲ（阿格）故城の兵士は、長安や洛陽に残してきた父や母、そして妻や子への恋慕の情で、胸をかきむしられることもあったに違いない。愛と悲しみに生きた辺境の兵士の想いと息遣いが、時空を超えて伝わってくるようであった。

画工たちはこうした軍人たちの心を思いやって絵筆を執ったのであろうか、彩りの中に限りない人間愛に満ちた仏教美学の精華を見ることができる。一人ひとりに題記（漢文の説明書き）や供養した人の名前も墨書され、その書法や字体の風格から、成立は唐代中期の作と分かった。帰国後、私は『シルクロードの光彩』（笠間書院）を発刊したが、そのカラーの表紙はアアイ石窟の文殊師利菩薩で飾った。

クチャには、キジル千仏洞やクムトラ千仏洞などの仏教石窟が10ヵ所あるが、いずれも川や湖のほとりの風光明媚な場所にあった。しかしアアイ石窟^⑥だけは、亀茲の都から遠く離れた深山幽谷にある。



天山山脈の奥深い谷の崖上にあるアアイ石窟の壁画

これは、天山山脈を越えて侵入し

てくる北方遊牧民族の攻撃を防備するアゲ故城の兵卒たちの礼拝所だったからである。

アアイ石窟の調査を終えた後、私はアゲ故城に入った。故城は銅^{どう} 廠^{しょう}川の西岸、標高 1560 メートルの高台にあり、城内からは唐代の貨幣、陶器、矢じりなどが出土した。高さ約6メートルの望楼に登り周囲を眺望したが、その遠大さは今もって忘れられない。駐留軍の布陣跡も測量し、その結果、この城は、六朝末期から唐代中期にかけて、約 3500 人の兵士が外敵の侵入に備えていたことが分かった。唐と亀茲の混成軍は、交易を通じて利害を一にし、また、同じ仏教徒として亀茲王国守護のために戦ったのである。

ところで、亀茲国は『漢書』によると、人口は12万余、天山南路最大のオアシスとして、金・銅・鉄・鉛・錫などを大量に産し、アゲ故城の近くには漢代の精錬所跡も残っていた。また、この地は農耕も盛んで、梨・桃・杏・ブドウ・ザクロが多くとれた。さらに、管弦伎楽の優れていることは、諸国にまで聞こえ、亀茲音楽としてわが国の宮中音楽にも影響を与えている。たとえば、キジル千仏洞の壁画に描かれている五絃琵琶は、中国本土ではすでに滅び去り、その形状から正倉院にある琵琶と同じ系統であることが分かる。その亀茲国の規模については、「外城は長安城に等しく、室屋は壯麗なり」（梁書）、「王宮の壯麗さは、煥^{かん}として神居の若^{ごと}し」（晋書^{しんじょ}）と記されている。

クチャはまさに芸術と文化、なかんずく仏教芸術の開花した歴史の町であった。クチャ県長の息子であるアサット君は大阪教育大学の修士課程で、「鳩摩羅什の研究」をテーマに修士論文を書くなど、大変優秀な若き学徒であった。ある日ある時、私の研究室に来て「先生、私は後悔しています。幼い頃、よくクチャの石窟寺院に友達と遊びに行き、その時、土饅頭を作っては皆で仏像や壁画に投げつけて遊んでいました。今考えると恥ずかしいです。クチャの仏教遺跡は中国だけでなく、人類の貴重な遺産です。知らなかったとはいえ、本当に悔やまれます」と。

今日、クチャはウィグル人が住むイスラム圏となっている。しかし、仏教者である鳩摩羅什を郷土の



誇るべき偉人として、その業績を高く評価し、『郷土の偉人、鳩摩羅什』というウィグル語の本まで出版しているのには驚いた。

クチャのクムトラ千仏洞の壁面に刻まれた亀茲文刻記の拓本

トムシュク（尉頭国）、インドと中国を接続させた仏教王国

今から 16 年前、大阪教育大学の大学院の教え子の一人で、シルクロードを研究している^{しんきょう}新疆 ウィグル自治区ウルムチの壮族の青年から、古代王国のトムシュク^{いとう}（尉頭国）を案内したいとの連絡が入った。私はさっそく図書館で、その歴史や文化や過去における踏査の記録を調べた。フランスのペリオが 1906 年に、イギリスのスタインは 1908 年に、1913 年にはドイツのル・コック、次いで、1928 年には^{こうぶんひつ}黄文弼とスウェーデン調査団、1959 年には、中国科学院と新疆文化庁の共同調査がトムシュクに入っていることが分かった。日本人はまだ誰もトムシュクを訪れていないことも確認した。



古代・尉頭国のトクズサライ仏教寺院跡

調査を 2005 年 8 月と 11 月、2007 年 9 月の 3 回行なった。トムシュク市政府の全面的協力も得、地元の文物保護管理所の 3 名の研究員も加わった。さらにシルクロード学の権威で『シルクロード辞典』を著した^{りがい}李愷博士にも調査に参加して頂いた。

西域 36 カ国の一つ、尉頭国の歴史は古く、漢代にまでさかのぼることができる。都はトムシュク山麓の尉頭谷にあり、3世紀から7世紀までは朝貢諸国の官人のほか、多くのソグド商人が珍貨奇物を持って往来し、賑わいを見せていた。ガンダーラ語、トカラ語、塞語、于闐語、漢語が話され、出土する花紋の絹製品、彩絵陶器、精微な工芸品はその文化の高さを示している。

尉頭国は疏勒国と亀兹国の中間にある小さな王国で、人口は2300人、兵士は約800人であった。大国に従属するしか存続を保つ方法はなく、歴史の変転の中で数奇な運命にもあそばれた国である。3世紀初頭から亀兹国の傘下に入り、6世紀にはトクズサライ山の南麓の高さ55メートルの九台北山に遷都、この山城を中心として近辺の若干のオアシスを支配していた。

山上の王都の西側に広大な仏教遺跡、トクズサライ寺院がある。3世紀から8世紀中頃までは、仏塔や僧院が立ち並び、宿坊は参詣する仏教徒であふれ、仏殿からの読経は止むことがなかった。私が寺院の西壁を調査していたところ、高さ30メートル余の岸壁の中腹に、等身大の仏・菩薩が6体刻まれているのに気づきカメラに収めた。1300年もの長い間、風雪にさらされていたが、まだ顔も身体も残存していた。

唐王朝は尉頭国を郁頭州と改め、クチャ（亀兹国）に隷属させた。しかし、シルクロードがイスラム化するにつれて、郁頭州はカシュガルのカラハン王朝の攻撃を受け落城した。私は王城内から、矢じりの



トムシュク出土の浮彫には、悪鬼を踏みつける諸天善神が刻まれていた



チラン故城の寺院跡。仏像を安置した龕が8窟あった

ほか、多数の黒ずんだ木片や、焼けただれた日干しレンガが散乱しているのを見つけた。仏教王国を守ろうとして立ち上がり、玉砕していった仏教徒たちはもともと不殺生を基本としていたが、仏法守護のためには「刀杖等これを許す」との大乘仏教の教えのもと、イスラムと戦ったのである。

王都の断崖に浮彫された風化寸前の六体の仏像も見つけた。王城とトクズサライ寺院の間、約500メートルの間は、魏晉から唐代までの織物が地上に散乱していた。私が注目した出土文物は、五銖錢の鑄

型である。イラン高原に盛行した青銅冶金術が、やがて尉頭国に伝えられ、鑄型を作って貨幣を流通させ、その貨幣経済の確立は、中国本土よりも早い。トムシュクの北方の天山山脈に入ったところでは貨幣を作るための、赤（酸化鉄）、黄（硫化鉄）をはじめ、優良な鉱石が各種産出していることも分かった。

トムシュクの北東 75 キロの砂漠の中に、巨大な城跡があった。尉頭国の支城の一つ、チラン（棋蘭）故城である。故城は、2100 年ほど前、前漢時代に築かれた。私は事前に G P S で、ほぼ正確な平面図を作成、荒涼たるタクラマカンの大砂漠の中であつたが、迷わず城に辿り着くことができた。

城は東西約 1.5 キロ、南北約 2 キロ、北西の望楼の高さは 13 メートル、一辺が 12 メートル余の、正方形の仏教寺院もあり、^{ぶつがん}仏龕が 8 つ確認できた。しかし、中は破壊され仏像も壁画も全く消えうせていた。インド風の高さ 7 メートル余の屋根の丸い寺門が残存していたが、崩壊寸前であつた。

東インドに発生した仏教は、やがて西北インドやパキスタンやアフガニスタンに伝わり、さらに、6000 メートルを超えるパミールの山河を越えてカシュガルに伝来、仏教はそこからさらに東に伝わり、クチャまで来ると、こんどは中国文化の強い影響を受けることになる。尉頭国というならば、インド文化圏と中国文化圏を接続させた重要な地域であり、仏教がインドの民族宗教から世界宗教へと飛翔する舞台となった地域であるといえる。



尉頭国の王城の断崖には、仏法による守護を願う人々によって、多くの仏・菩薩が刻まれていた

興亡の果てに忽然と消えた尉頭国、そして、仏教が世界的普遍思想へと脱皮した拠点トクズサライ寺院やチラン故城に足を踏み入れることができたことは、望外の喜びでもある。

カシュガル（疏勒）は師弟誓願の地

疏勒は、中国やペルシア、またガンダーラやソグドからの商人で行き交う異国情緒に満ちたオアシスであつた。2300 年ほど前から、交易上の重要な中継地として、「漢書」西域伝に「市列あり」、すなわち「町にはバザールがある」と記されている。

前漢時代に確立された崑崙山脈北麓の西域南道は、敦煌から楼蘭に、そして米蘭・于闐・^{ようじょう さしや}葉城・莎車を経て疏勒へと連結している。また、天山山脈南麓を走る西域北道は、敦煌から吐魯番に、そして焉耆・龜茲・尉頭を経て疏勒で合流しており、いずれのコースにしても必ず通らなければならない町がカシュガルであつた。

町は^{イエルチャン}葉爾羌河など3本の大河が流れ水は豊富である。4世紀中頃の人口は約2万人、王城と推定されるハノイ故城は、東西3.6キロ、南北1.5キロもあり、疏勒国の9支城を守る中心地であった。今でも東壁が約80メートル残存していた。

この町には古代遺跡や名所旧跡が多く、市内にはエティガール寺院や香妃墓や班超公園などがある。町の南18キロには、1800年前にカカマカ河の断崖に穿たれた三仙洞があり、70体もの仏や菩薩が色鮮やかに描かれていた。また、北方には、高さ12メートル余の^{モル}莫尔仏塔2基が、流沙の中に悄然として聳えている。

カシュガル的一角、ウイグル族居住地区の老城には、約1000年前の古い街並みが迷路のように続き、職人たちが特産の刺繍帽や民族楽器や工芸品を売る名所となっている。この町で出会った子どもたちは、混血を繰り返してきたせい、肌や髪や目の色がさまざまである。

私は老城の建物の屋根が趣深く感じられたので、上空から撮影したいと思った。幸いにも、一番高い30建てのビルの屋上に登ることができ、日干し煉瓦の屋根が連なる街並みをカメラに収めることもできた。

若き日の鳩摩羅什は、西暦356年、ガンダーラでの留学を終えて、^{ういく}烏弋山離道を経由して、この疏勒に立ち寄り1年余修行している。この間の最大の成果は、生涯の師である^{スーリヤソーマ}須利耶蘇摩に出会い、小乗仏教から大乘仏教に転じたことである。師匠は、サンスクリットの法華経を授与し、「梵本を付属していわく、仏日西に入り、遺耀まさに東北に及ぶ。^{このてん}茲典、東北に於いて有縁なり。汝慎んで^{でんぐ}伝弘せよ」(僧肇『法華翻経後記』)と述べたという。仏教流布の付属を受けた羅什は、生涯この師の教えを実践しぬいていく。いうならばカシュガルは、師弟有縁であり、師弟誓願の地といえる。

思うに、華道、茶道、剣道、書道、柔道などに見られるように、みな「道」がついており、そこには必ず師から弟子への技と心の継承がなされている。私は、人生においても同じであると思う。時代が流れ、政治体制や人生観や社会観が変転しても変わらない指針、それは師匠を求め、その教えを生涯貫き通すことであろう。その、師弟不二の道を実践しぬいた先駆者の一人が、鳩摩羅什であるといえる。

疏勒の仏教が最も正しい姿で興隆したのは4世紀中頃である。しかし、644年にこの地を訪れた^{げんじょう}玄奘の『大唐西域記』に、「^{がらん}伽藍は数百箇所、僧徒は万余人」とあり、出家者が異常に多くなっていることが分かる。出家すれば、働かずして食べていけるので、学・素養も求道心も無い者が、大量に出



カシュガルにある班超公園の石像。後漢の將軍として西域經營に力を注ぎ、91年にパミール高原の東西50余国を服属させ定遠侯に封ぜられた

家し民衆から布施や供養を要求し続けたのである。

疏勒のもう一つの滅亡は、752 年のキルギスにおけるタラス河畔の戦いによる唐軍の大敗である。唐軍の西域からの撤退とイスラムの浸透、さらに国土の砂漠化によって疏勒国の王城は9 世紀頃に放棄された。

今日のカシュガルは、明代の初期（14 世紀）以後に新しく建設された町である。古代の疏勒国は流沙に埋没し、どこにあったかは不明となって



鳩摩羅什の生きた時代に創建された疏勒国のモル仏塔



新疆で出会ったウィグル族の少女

いる。ところが 2005 年 8 月、カシュガル地区博物館の館長の案内で、南新疆の古代遺跡を調査していたところ、偶然にも土地の古老からモル仏塔の南 10 キロの砂漠の中から、大規模な城郭跡が発見されたとの情報を得た。

私は、さっそく現地に赴き本格的に調査を開始した。周囲約 12 キロ、今まさに朽ち果てようとしている漢代の望楼や城壁が、幅約 4 メートル、長さ 25 メートル余あるのが確認できた。多くの出土品もあり、この地こそ鳩摩羅什ゆかりの疏勒国ではないかと思っている。

ホータン（于闐国）は宝玉と大乘仏教の国

1992 年の夏の日、ホータンの北方に広がるタクラマカン砂漠で、子守をしている少女に出会った。あまりの素朴さに心打たれ、記念に一緒に写真に納まった。さらに、ラクダ乗り場では 5、6 歳の少年にも会った。私を見るとめずらしい人種が来たと思ったのか、人なつこく近寄ってきた。カメラを向けるとポーズをとった。破れたシャツから臍が出ていたが、匈奴の子孫の風格を持ち、勇壮さを感じさせる少年だった。



5、6 歳ながらも匈奴の子孫を思わせる風格があった



漢からホータンに伝わった養蚕伝説を証明するかのように繁茂する 2000 年前の桑の木

ところでホータンの玉は、昔から「崑崙の玉」とも呼ばれた。前3世紀、楚の国王は 当時の強国である秦の皇帝から、15 の城と「和氏の璧」を交換したいと申し入れられた。いわゆる「完璧」の言葉の由来になった故事であるが、この璧もホータンの玉であるという。玉は、王や貴族の権威の象徴として尊重され、その多くはホータン産であった。原石は夏の増水期に、崑崙山中の雪解けの水と一緒に運ばれ、良質の白玉は、黄金と同じ値段で取引されている。私がホータンの調査をしていてホテルに戻ったら、一人のホータン人が訪ねてきた。自宅に大きい玉石を持っているから見に来て欲しいというのである。さっそく訪問したが、それは直径3メートルもある大型の玉石であった。

ビックリした私はどうして手に入れたのかと聞くと、大洪水があった日、朝早くホータン川に玉石を探しに行ったら、崑崙山脈から流れ落ちてきているのを見つけた。親戚一同、総がかり

で自宅に持ち帰ったという。政府に知られると持って行かれてしまうので、こうして庭に埋めて隠してあるのだと言う。私に売りたいと言ったが、想像を絶する高額なこと、それよりもどうしてホータンから日本に持ち帰るか等々、個人ではとても対処できないので鄭重にお断りした。きっと今もホータンのウィグル族の家の地中深く眠っているであろう。

ホータン（古代・于闐国）は、崑崙の北麓^{ひろ}に位置するシルクロード西域南道の要衝である。秦・漢のいわゆる西域36カ国の中でも、有力な王国であった。『大唐西域記』によれば、「礼儀をわきまえ性格は温順、学芸を習うを好み、博く技芸に達している。・・・音楽を尊び、人は歌舞を好む」とある。

地理上、インドに近いこともあり、前2世紀末、阿育大王の時代に成立した經典に、はやくも「于闐」の名を見ることができる。2世紀中頃には、カニシカ王朝の版図に入っている。今日、玄奘が訪れ『大唐西域記』に記載されている于闐国の街並みは、ホータン川の大洪水のため、地下約7メートルのところに埋もれているという。

1892年、ホータンの旧都であったヨートカン遺跡の南南西の仏教石窟から、カローシュティー文字で書写された「法句経」が発見された。これは西暦1～2世紀頃のもものと認定され、現存する最古層の仏典と考えられている。新疆ウィグル自治区博物館から共同発掘の話もあったが、個人では対応できないのでお断りした。

大谷探検隊がわが国に持ち帰り、その後、中国に流出したホータン出土、旅順博物館所蔵「梵文法華経断簡」がある。これは、5世紀から6世紀にかけて書写されたもので、鳩摩羅什がテキストとしたサ

ンスクリットの經典に、時代的に最も近い貴重な写本である。1997年、私の訪中時に、中国の社会科学院の蔣忠新博士からその存在を聞いたので、早速、日本での研究機関に連絡し、その出版に尽力させて頂いた。

また、ホータンの絹の歴史は古く、『大唐西域記』に、漢から于闐国へ嫁いできた王女が、冠の中に蚕を忍ばせて養蚕を伝えたという。初めは単なる伝説かと思われたが、ホータン郊外のダンドン・ウィリク遺跡から、桑蚕伝説を描いた板絵が出土し、この西漸説が事実であることをうかがわせた。また、市内には直径3メートルほどの漢代に植えられた桑の木も残っていた。

于闐国は、仏教守護のため約40年にわたってイスラムのカラハン王朝軍と孤独な宗教戦争をした。しかし、1008年頃落城し、大小幾百の寺院はすべて破壊し尽された。滅亡時のようすを『イスラム突厥語大詞典』に、「我々は洪水のように町に入った。寺院を破壊し、仏像の上に糞をかけた」と記されている。

近年、ホータン郊外のタクラマカン砂漠の中から石塔群が発見された。その下を掘ってみたところ、数百体の白骨が出てきたという。イスラム教徒に殺された仏教徒のものであった。



ホータンにある于闐国時代のマリカワト故城

ホータンは、山脈と河川と流沙に囲まれたた美し

い町である。農耕が盛んで果樹は茂り、住民はみな音楽、歌舞が好きであった。唐の岑参は、「崑崙山南月斜めならんと欲し、胡人月に向って胡笳^{こか}を吹く」と視覚と聴覚を駆使して歌っている。

ところで、アショーカ王の時代に成立した「大方等大集月藏經」には、于闐など西域の地名が50余も記されており、于闐の地理的位置からして、中央アジアへの仏教流入にあたっては、前2世紀末に仏教が伝来したと推定されるが、正確な于闐への仏教流伝時期については、諸説が入り乱れ定まっていない⁷。その理由は、仏滅に諸説があるからだ。釈迦の死亡年が定まらないので、滅後何年に出現した人物といっても、西暦年代に設定できない。今ここに入滅の主たるものを列挙すれば次の通りである。

- (A) 前544年説（東南アジア各国）
- (B) 前961年説（チベット）

⁷ ホータン（于闐国）への仏教伝来の時期については、『大唐西域記』巻12の22項に、仏教伝来の伝説が述べられている。詳しくは『大唐西域記』（平凡社、玄奘著、水谷真成訳、295～304ページ）を参照。

- (C) 前 1027 年説 (中国中原仏教界)
- (D) 前 384・前 386・前 587 年説 (日本)
- (E) 前 415 年説 (ヨーロッパ)
- (F) 前 486 年説 (点記説)
- (G) 前 949 年説 (法琳の説)

インドでは年に2回の雨期があり、1回の雨期を1年と計算していたようである。雨安居すなわち僧は雨期の間、精舎や石窟に入って経典を読誦したり、また座禅をして修行した。そこでは1回安居するとテキストに1つ朱点を施していた。インドでは1年を2年と記録していた。南岳大師はその願文において「正法世に住すること五百、像法に世に住すること一千載」と述べているが、この正法五百年説は、まさにインドの仏教流布の期間を太陽暦で算出したものと考えられる。

葉城 (カルガリク) のシィテア故城とキバン千仏洞

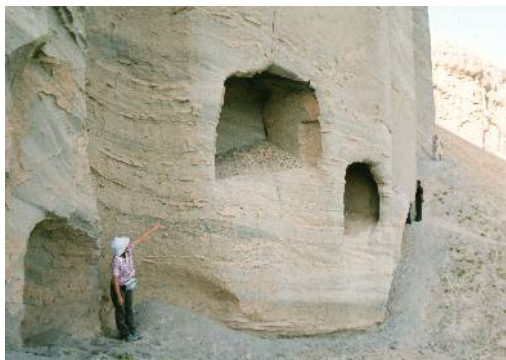
西域南道の葉城は、ヤルカンドの南方 65 キロにある歴史の町で、昔は大変に仏教が栄えていた。『大唐西域記』にも、「国の周囲は千余里、王城は周囲十余里」、「住民は篤く三宝を信じ、好んで福德利益を楽しんでいる」、「大乘仏典が多くあり、この町より盛んなところはない」と記されている。

キバン (棋盤) 千仏洞は、葉城から西南約 80 キロ、キバン村の西 12 キロの、河畔の東壁にあった。現在、10 窟あるのが確認でき、すべて単窟で方形か長方形で造られている。石窟の大きいものは、奥行



音楽好きなシィテア故城の管理人

き 5 メートル、幅 4 メートル、高さ 4 メートル、頂部はアーチ型のものと覆斗状のものがある。1 窟に



キバン千仏洞の窟内には、今は仏像も壁画も残っていない

1 体の仏像の台座が残っており、私は巻尺とカメラを持って窟内に入ってみた。顔料の朱色などの一部は確認できたが、全体として破損がひどく、その内容はわからない。下地に混ぜたと見られる葦草の繊維のみが、壁面のいたるところに付着していた。

キバン千仏洞の創建は、その造営方法から推測するに、2 世紀前後と思われる。ガンダーラから新疆へと北伝する仏教の入り口にあたり、

石室の近辺からは、銅銭や双耳紅陶罐そうじこうとうかんなどが出土した。

10世紀初めに、トルコ系のカラハン王朝によってキバン村は破壊された。イスラム教に改宗しない仏教徒は、東方に逃亡した。供養人のいなくなった千仏洞は放棄され、1000年もの長い間、タクラマカン砂漠から降り落ちる流沙のために、石窟の3分の2ほどは埋没していた。しかし、そのために砂塵の下

の埋もれた石室には、壁画や仏像が残っているようである。私は、いつの日かその砂山を取り除き、窟

内を調査してみたいと願っている。

なお、この地には次のような伝説が残っている。昔、キバン千仏洞を中心に栄えた王国があった。ある日、王女は1人の占い師から、次のようなことを告げられた。「あなたは100日後に必ず死ぬ。ただし、外部との交流を総て絶てば助かる」と。国王は驚き王女をキバン千仏洞に隠れさせ、厳重な警護をひいた。99日目、1



キバン千仏洞の南の彼方は、万年雪の輝く6000m級のパミール高原である

人の侍女がおいしそうなブドウを持ってきた。王女は外部から採ってきたというので一瞬ためらった

が、あまりにもおいしそうなので、ブドウの籠に手を入れ1粒食べようとした。するとブドウの房の中に隠れていた1匹の毒蜂が王女を刺した。王女は身体中に毒がまわり、死んでしまった」と、これは一たび決めたことを最後までやり抜くことの大切さを教える説として今に伝えられている。

現地で調査中、地元の牧人から新しいニュースが飛び込んできた。キバン千仏洞の西方20キロの砂漠の中から、また、新しい石窟寺院が発見されたというのである。道もないので、ラクダなら3日ほどか

かるという。私は後ろ髪を引かれる思いでキバン村を後にしたが、近い将来、ぜひ砂漠の中に横たわる名も無き石窟も訪ねたいと思っている。



パミール高原で一人のタジク族の女性が薬草を採取していた

キバン千仏洞の調査を終えたあと葉城にもどり、町の南の郊外にあるシィテア故城の調査に入った。この城は仏教王国の于闐国を攻撃するための前線基地として、10世紀にカラハン王朝が築いた城で

ある。攻略時には補給基地として十分役立ったが、1218年、シィテア城はモンゴル軍の猛攻撃に遭い落

城している。

シィテア故城の内部を調査したところ、城は日干し煉瓦で築かれ、高さ6メートル、長さ50メートル

余の城壁が、町を囲むように点在している。私は朽ち果てた建物や、干あがった河川、また陶窯^{とうよう}の跡などを調査した。城は油を塗った弓矢による攻撃で炎上したらしく、真っ黒に焦げた陶片や、貨幣「馬錢」などが散乱していた。

帰国後、キバン千仏洞やシテア故城の現状を報告するため奈良県橿原市役所の記者クラブで記者会見した。新聞やテレビで、「シルクロードの『幻の街』初踏査」、「中国西域のシテア故城、城壁や陶片など確認」とのタイトルで取り上げられた。早稲田大学の長澤和俊名誉教授もこの新聞記事にコメントを寄せて下さった。探検家が苦労の末、目的地に到達した喜びと同じく、キバン千仏洞とシテア故城という未開放の遺跡を同時に調査できた喜びや感激は、いまでも私の胸中に鮮烈に刻み込まれている。



大乘仏教の于闐国を攻撃するため築かれたイスラムのカラハン王朝の出城であったシテア故城

北の要塞、北庭故城と西大寺

2001年3月、長い間の念願が叶って、中国・新疆ウイグル自治区ジムサ県の北庭故城を調査することができた。1988年2月に、全国重点文物保护单位に指定されてからは、外国人は足を踏み入れることができない。

幸いにも私は、吉木薩爾^{ジムサル}県文物管理局の特別許可を取得でき、現地の研究員と共に北庭故城の本格的な調査を実施した。北庭故城は、ウルムチから東北に向い、米泉、阜康、滋泥泉^{ふこう じでいせん}を経て、その後、北に向かい12キロで到着する。



北庭の歴史は古く、前漢時代より始まる。初めは異民族である烏孫族^{うそん}の支配地域であった。その後、前60年頃にトルファンを中心とした、車師后部の支配地^{しやしこうぶ}となっている。東部天山山脈の北麓に位置して、ステップ路とオアシス路の双方を俯瞰できる交通上の重要な

北庭城に2年間住んだ岑参の詩集画本

場所にあり、自然条件はすばらしく土地も肥え、水も豊富である。

『通典』には、「歴代の胡虜^{こりょ}が住んでいた所である。貞観中^{じょうがん}（627～649）、唐が高昌を征服した時、西突厥^{しかんふとじょう}は兵を可汗浮図^{かかんふとじょう}城に駐留し、高昌と相対していたが、高昌が唐に平らげられたので、懼^{おそ}れて来降^{きやう}した。唐は其の地を庭州^{ていしゅう}と名づけ、北庭都護府^{ほくていとごふ}を置いた」と記されている。「都護府^{すべ}」とは、「都てを護る役所」の意である。

『元和郡県志』にも、「帳門^{げんなぐんけんし}が皆、東に向かって門を開いているのは、長安を慕っているからであり、城内に住む漢人^{りょうさく}は、龍朔^{りゅうさく}（661～663）已後、流れ移ってきた人たちである」とある。

北庭故城の規模は広大で、南北の長さは約1.5キロ、東西の幅は約1000メートル、城は内外2城に分かれていた。外城の周囲は約4600メートル、内城の周囲は約3000メートルで、少し東北に偏し、今日、南と北と西で本格的な城郭の跡を確認することができる。唐はたえず北庭城の内外に、精鋭1万2千もの軍を配備し、一大要塞として88年もの長い間駐留し続けた。

唐の詩人で、2年間にわたって北庭城^{しんじん}に住んだ岑参^{しんじん}は、「登北庭北楼呈幕中諸公」と題する詩で、

「城内に丘があり、人工の池もある」と歌っている。私は、この詩

に詠まれた丘や池を必死になって探した。そしてやっとのことで、北庭川より水を引いて造った池の跡を発見した。今は水枯れになっていたが、湖床は岩塩が積み重なり白く輝いていた。

さらに丘も見つけた。唐代にはこの池を囲んで四季の祭りも盛大に行われ、岑参は美しい月光のふり



そそぐ中、縁日で賑わう池辺で酒を飲み、ほろ酔い気分で一人、人ごみを抜け出し、北の楼閣に向って歩いたという。私は、この詩句を脳裏に浮かべながら、岑参の悲しみと歓びを偲んだ。喧騒のなか一人、人生の起伏をかみしめ孤愁と興趣に酔う姿が臉に浮かび、言いようのない感懐に包まれ胸が熱くなった。

ところで、四場湖を源流とする北庭川の流れは、『使高昌記』によれば、「長江数千里」とある。この豊かな水により、北庭一帯は、農業生産が多角的に展開され、中でも北庭麵の美味はトルファンなど近郊のオアシスにまで知れわたっている。

北庭・西大寺の交脚菩薩



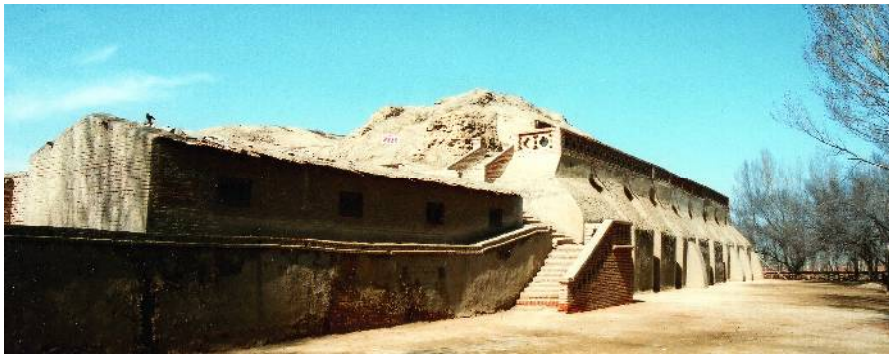
北庭故城の西の城壁址。農民がところどころ穴を開け鶏小屋にしていた

唐は840年、北庭城の一部に回鶻^{ウィグル}人の居住を認めた。以後、北庭城は、胡商や兵士の往来するシルクロードの草原の路の一都会として繁盛した。この部族はのち、866年、トルファン盆地に南下して高昌回鶻政権を樹立する。

1206年、蒙古のチンギス汗の猛攻撃を受け北庭城は落城、その後は蒙古軍の地方長官が駐留する基地^{ビシュバリク}となり、別失八里と呼ばれている。支配者は変わっても、シルクロード交通の重要拠点であることから、蒙古は約千人の兵士を屯田させ、元軍の一拠点とした。

明王朝が中国を統一すると、北庭地方では蒙古のチャガタイ(察合台)の後裔が中心になって活動した。しかし、戦争はやむことなく、とうとう北庭城は戦乱のためにすべて炎上、城内は完全に流砂の中に埋没し、住民は四散し歴史から消滅していった。

以来600年、今日では辺境の一寒村として、ウィグル族が十数戸住んでいるだけの農村となっていた。北庭故城内を調査している時に目に写った光景は、住民が故城の城壁に穴を空けて倉庫代わりに使った



ジュンガル盆地にある北庭・西大寺。中には涅槃仏や仏教壁画や菩薩像がある

り、鶏や牛小屋の一部として利用している現状であった。

ところで、北庭は天山東麓の一大仏教拠点であった。「浮図城」、「浮遠城」と呼ばれたり、「金蒲城」、「金満城」などと呼称されていた。702年に、北庭大都護府となった前後、北庭管轄内に大寺院が次々と建立された。高台寺、応運大寧寺、龍興寺、游仏寺、西寺(西大寺)などには、仏像が安置され、美しい壁画が天井を埋め尽くしていた。文字が読めないジュンガル盆地の民に、仏の偉大さを教示しようとして、絵画的な手法がとられたのである。すなわち、視覚的世界を刺激して、その宗教的真実や正義を理解させようとしたといえる。美的世界を媒介にして、豊かな感性と想像力を惹起させ、仏教美学の精華を現実社会に具現しようとする運動の中から、壮麗な仏教芸術が誕生したのである。

北庭故城の西方約750メートルに位置する西寺は、その規模の大きいことから西大寺とも呼ばれていた。南北は約71メートル、東西は約44メートルもある。地下に仏教施設があり、地面以下は堅木の土台で支え、地上は泥の煉瓦で建てられていた。壁中のところどころに枯楊の柱を入れてあるが、その理

由は寺院の屋根をしっかりと固定するためである。また、山門、正殿、配殿、寢殿、倉庫、庭院、僧房などが配置されている。現存する正殿の高さは約14.5メートル、中に大型泥塑の涅槃仏があった。仏教壁画や勇壮な征戦絵図も残っているが、主たる壁画の内容は、仏教經典の内容を分かり易く絵解きした経変物語であった。

ところで、西大寺の壁画の成分を分析したところ、青い色の部分は高価な宝石のラピスラズリを使用しており、アフガニスタン北部のパダフアン地方の産出の顔料であることがわかった。「ラピス」はラテン語で「石」、「ラズリ」はペルシア語で「青」の意である。ナトリウムやカルシウムを含むケイ酸塩鉱物で、日本では産出しない。

ラピスラズリは、大半を産出するアフガニスタン産が有名で、エジプト王のツタンカーメンの黄金マスクや、紀元前のメソポタミア文明の装身具の装飾などにも使われた。日本では、瑠璃と呼ばれ、仏教の七宝の一つともなっている。高松塚古墳の壁画について、東京文化財研究所が、特定の物質に一定の波長の電磁波を当てると、固有の蛍光を出す性質に着目、すべての壁画を分析し分光曲線を調べたところ、飛鳥美人のスカートなど、青い部分の彩色の蛍光反応が、ラピスラズリの波長とほぼ一致したと発表している。さらに、アフガニスタンからラピスラズリの原石を取り寄せて色合いなどを比較したところ、アフガニスタン産の可能性が高いと判断されている。

明日香村のラピスラズリは、ウズベキスタンのソグト商人が長安に持ってきたものを、遣隋使が購入し日本に持ち帰ったものと推断される。洛陽の都を拠点として、西のシルクロードと、東のシルクロードがダイナミックに交流したという物質の東漸を示している⁸。

私は西大寺の調査の中で、正殿の基壇に陰刻文を施した涼州様式のほぼ等身大の交脚菩薩像が残存していることに注目した。首や手は破壊されていたが、幸いにも、身体はまだ往時の姿を留めていた。外形服飾などの特色から、8世紀から9世紀の作と考えられ、衣紋線に見られる高雅な様式からは、六朝時代の余風も垣間見ることができた。

北庭西大寺の交脚仏像の様式は、西はイラン地域、南は中インド、東は敦煌や洛陽などに及んでいる。北はクチャのキジル千仏洞が知られていたが、そこより約600キロ北東の北庭で交脚菩薩が確認されたことは驚きであった。まさしくこれは、交脚仏像の北限と確認できる。

もちろん交脚は中国だけでなく、スワート博物館の「仏への出家」の中の執金剛神は3～4世紀の交脚であり、ボドガヤ考古博物館の中の前1世紀のヤクシー女神像や、カルカッタインド博物館のマトゥラ出土の2世紀の「ヤクシー像と仏教説話図」の中でも見ることができる。さらにペシャワール博物館に行けば、2～3世紀頃の供養者群像の中にあるかと思えば、カブール博物館では菩薩だけでなく、ア

⁸ ソグド人の文化や芸術、興亡の歴史についての研究書が4人の研究者によって発表された。『ソグド人の美術と言語』(曾布川寛・吉田豊編、臨川書店)である。唐代に中央アジアで活躍したイラン系の民族であるソグド人が、仏教伝来とともに活躍し、イスラム化とともに消滅していった要因を明らかにしている。

一チの下で花を持って立つ踊り子までが交脚である。

北庭の西大寺で交脚菩薩を参観できた事は、私にとっては大きな感動であり収穫であった。この脚をX字状に組む^{あぐら}胡坐の風習は、西域で流行したが、椅子に坐って^{くるぶし}踝を交差する姿勢は、北方遊牧民族の王侯貴族の坐りに類似しており、その風習は遠くイラン地域にまで及んでいる。交脚の仏像が日本に伝わらなかった理由は、腰を掛けて交脚する姿勢は、あまりにも不安定で、安定や静寂を好む日本人の精神風土にそぐわなかったからだと思われる。

ネパールは釈迦生誕の地

私は、少年時代から3つの夢を抱いていた。それは、釈迦の生まれたネパールのカピラ城を訪れ、悠久 2500 年の仏教の原点の地に立つことであった。2つ目は、アレクサンドロス大王の出生地、マケドニアのペラ遺跡を訪ねること。そして3つ目は、ナポレオンが幽閉された絶海の孤島、セントヘレナ島に渡ることであった。3番目を除いて、前2つの目的は達せられた。

私がインド国境を越えて、ネパール南部のタライ平原のルンビニを訪ねたのは、今から 11 年前であった。「文化的伝統または文明、唯一の少なくとも稀な証拠」として、1997 年にユネスコの世界遺産に登録されている遺跡である。



釈迦が生まれてから出家するまでの 18 年間（諸説あり）住んだネパール・ルンビニのカピラ城跡



ネパールのルンビニからインドに向かって釈迦が歩いたであろう一本の道

春霞の漂うルンビニは、静かな村で、豊かな田園が連なり牧歌的な風光が続いていた。長い髯をはやした老人も赤子を抱いた婦人も、私の姿を見かけると、どこの国の人だろうかと近寄ってきた。子どもたちも、物珍しいのか、ぞろぞろ後についてきた。

ところで、マウリア王朝、第3代の王であるアショーカ（阿育）王は、仏教が全イ

ンドに広まるきっかけを作った人物である。武力による征服から、法による統治をめざし、平和の尊さや生命の尊厳を刻んだ数多くの石柱を各地に建立した。また、仏教の理念を詔勅として発布、それを石や崖に刻み、巡礼した地域ごとに、アショーカ石柱といわれるモニュメントも建てた。ルンビニの石柱の銘文には、「ここで世尊が誕生せられたのを記念するためである」とあり、このことにより、釈迦の出生地も確認でき、産湯をつかったという小さな池も写真に収めることができた。

釈迦は、紀元前4～5世紀頃^{じょうぼんのう}に出現。父の名は、浄飯王という。この名のごとく、村には穀物が豊かに実り、食糧生産も順調のようであった。この人物は、サンスクリットでガウタマ・シッダールターといい、カピラ城を中心とした釈迦族の王子として生まれた。仏典では釈迦の誕生について、母親の摩耶^{まや}夫人がお産のため実家への里帰りの途中、ルンビニにある花園で休んでいた時に誕生したという。

釈迦は生まれてすぐに七歩歩き、右手で天空を指差し左手で大地を指して、「天上天下唯我独尊」と述べたと伝えられている。

現実にはありえないことであるが、釈迦の偉大さを後世に伝えるための逸話として残されている。釈迦の母は、生後1週間で



ネパールのカトマンズの王宮前広場



カトマンズ市内の釈迦族が多く住む地域では、仏教寺院が聳え信者が種々の供物を奉げていた

亡くなり、妹の摩訶波闍波提（マハーブラジャパティ）によって育てられた。

釈迦は16歳で母方の従妹のヤショーダラー姫と結婚し、一子、ラーフラをもうけた。ラーフラは後、釈迦の十大弟子の一人として活躍している人物である。

ネパールからインドに旅立ったのは、19歳（または29歳）といわれる。出家の動機は、四門出遊の故事として残っている。すなわち、ある日に釈迦が東門に行ってみると老人に会い、南門では病人にあった。また西門では死者に会い、生老病死の無常

を感じたという。北門に行ってみると清

らかな聖者に会い、出家の意思を持ったという。私は、ルンビニから遙かインドに続く鬱蒼とした樹々の下に一本の細い道を見つけ、何枚も写真を撮った。それは、若き日の釈迦が歩いた道だからだ。

ところで、ネパール人の王政への不満は国内に充満していた。王宮を見学した時、歴代国王と夫人の肖像画が展示されていたが、2001年6月に発生した王宮内の王族殺害事件により、国王以下、王族9名が死亡した。国王の弟のギャネンドラが即位したが国王独裁に抗議した国民の前に、2006年4月、国権を国民に返還して王政を廃止し連邦民主共和国の道を選んだ。しかし、共産党毛派、ネパール会議派、ネパール共和党マルクス・レーニン主義連合派等々の権力闘争により政治的混乱が今も続いている。

そのような時にネパールのカトマンズで大地震が起き、貴重な建造物が崩壊した。私がカトマンズに入ったのは地震が起きる2か月前であったので、釈迦族の住む町パタンのマハバウダのようすも、市内中心地の王宮前広場の貴重な文化遺産も全てカメラに収めることができた。

東インドは仏教誕生の聖地

仏教発祥の地、東インドを調査する旅で、『平家物語』などに登場する祇園精舎を訪ねた。釈迦在世中、王舎城で一人の大富豪・須達長者が仏教に皈依し、コーサラ国のしだ祇陀太子とともに精舎を寄進、やがて竹林精舎や祇園精舎などが林立する一大仏教拠点となる。さらに5世紀初頭、その周りに多くの寺院が建立され、その中心がナーランダ仏教僧院である。



釈迦教団最大の拠点コーサラ国のナーランダ僧院遺跡。広大な敷地に多くの校舎、学寮、僧坊跡があった

法顕、玄奘など後世に名を残した中国

の入にゅうじく竺僧は169名、仏教の真髄を求めてこの地にやって来た。現地に立ってみると、タクラマカンの流沙を越え、6000メートルに及ぶパミール高原を越えてナーランダで一同に会し、一心に修行し研究している姿が臉に浮かんで見えるようであった。

世界最古の総合大学ともいうべき僧院ナーランダは、5世紀に建てられた仏教研究の道場で、図書館や多くの講堂、僧坊が建ち並び、仏教学はいうに及ばず、全インドの学術研究の一大拠点であった。最盛期には全インドからだけでなく、トルコ、アフガニスタン、パキスタン、中国、チベット、モンゴル、

朝鮮半島などから、1万人以上の学生が在籍していた。2000人に及ぶ教師、蔵書は900万卷に及んだという。しかし、12世紀末に、イスラム勢力によって破壊された。

いま、ナーランダ大学として、800年ぶりに復興するプロジェクトをインド政府が提案し、日本を含む各国が支持を表明している。既に、ノーベル経済学賞の受賞者であるアマルティア・セン教授が理事長に就任、大学の特色である「知識を授け、広め、分かち合うこと。それが総てである」という精神を、いかに具現できるか真摯な検討がなされている。

私は2011年2月、「鳩摩羅什国際學術討論会」で研究発表するため、インドのデリーを訪ねた。会場でナーランダ大学のゴーパ・サバロワール副総長に会い、大学再建の話聞いた。新生ナーランダ大学



東インドのマカダ国の王舎城郊外にある霊鷲山。
この山頂で法華経などの大乘仏教が説かれた

のキャンパスは、ナーランダ遺跡が、世界遺産に指定されていることもあって、同じ敷地内に建てることはできない。そのため、そこから10キロほど離れたところに建設され、最初は7分野の大学院大学でスタートし、将来的に学部レベルも導入する予定だという。教育の絆でアジアを結び、世界とダイナミックに交流する新生ナーランダ大学に大いに期待したい。ところで、旅の中で、印象深く心に刻まれた思い出の地がある。それは、東インドのマカダ国の王舎城（ラージャグリハ）の北東にある釈迦ゆかりの霊鷲山^{りょうじゆせん}の山頂。ここは、釈迦が晩年、72歳から80歳までの間、法華経をはじめ重要な大乘經典が説かれた場所で、鷲に似ているのでこの名が付けられたという。中腹には、迦葉^{かしよう}や阿難などが、修行に励んだという洞窟もあり、行く先々、釈迦にまつわる仏塔や石柱があった。この地に自ら足を踏み入れることができたことは感慨深いものであった。

釈迦の修行時代のように、今日、断食する釈迦苦行像などによってうかがい知ることができる。しかし、どんなに肉体を傷め付けても、その彼方に悟りのないことを知った釈迦は、インドのビハール州を流れるガンジス川の支流、王舎城の西に流れる尼連禪河（ナイランジャンナー河）で身を洗い、若い娘の奉^{ちちがゆ}げ乳粥を飲んで衰弱した体力を回復させ、河辺の菩提樹の下に坐して瞑想に入った。そし

のキャンパスは、ナーランダ遺跡が、世界遺産に指定されていることもあって、同じ敷地内に建てることはできない。そのため、そこから10キロほど離れたところに建設され、最初は7分野の大学院大学でスタートし、将来的に学部レベルも導入する予定だという。教育の絆でアジアを結び、世界とダイナミックに交流する新生ナーランダ大学に大いに期待したい。ところで、旅の中で、印象深く心に刻まれた思い出の地がある。それは、東インドのマカダ国の王舎城（ラ



東インドのサールナート。釈迦が初めて説法した鹿野苑

て、ついに悟りに達し、宇宙と生命を貫く根本の法に目覚め仏陀となった。その瞑想の地を訪ねてみたところ、尼連禅河は想像していたよりは小さな川であったが、今も清流をたたえ南東にゆったりと流れていた。今この地には、7世紀ごろの建築、高さ55メートルのブッタガヤーの大塔（大菩提寺）が建立されている。

悟りを開いた釈迦は、まず、今日のサルナートの^{ろくやおん}鹿野苑で、かつて共に修行した5人の従者に初めて説法したという。私は、仏塔（ダメーク・ストゥーパ）が厳然と聳えている周囲をめぐり、その石刻を詳細に調査した。

思うに、エジプトのギザにあるクフ王のピラミッドについては、奴隸建造説が通説だった。しかし、建設に従事した労働者の複数の墓が次々と見つかったことから、近年のエジプト学の研究者たちは、王の栄光を永遠ならしめんとした使命感を持った多くの人々の献身的な努力によって、ピラミッド建設は成し遂げられたと考えはじめています。

インドの仏塔や石柱を建立した人々も、仏の偉大さを後世に伝えようとする熱烈たる庶民の息吹に支えられていたのだと思う。「源遠流長」の精神と同じく、眼前の遺跡群からは、造営に携わった人々の真心が脈動しているようであった。

なお、インド仏教の衰亡については、私は最大の原因は、5世紀中頃に活躍した無著と世親（天親）の兄弟に起因すると思う。瑜伽行派の学説を学んだ無著はヨーガによって悟達を得ようとした。いわゆる唯識論である。なお、龍樹の後継者は中観派といわれ、その後両派とも学説を深化していく中で密教化していった。

釈迦は呪術や呪文を強く排除している。しかし、仏教の根本の教えに外れなければ、世俗の風習にかかわってもよいとの考えが広まった。これは仏教を弘通するための方便であったが、民族宗教であるバラモン儀礼の流れの中にかえって仏教が取り込まれていった。その結果、僧たちは僧院にこもり秘儀の仏教化に専念していったのである。さらに仏教は社会的影響を強めようとして、貴頭に結びつき、その経済的な支

援によって衣食を充足させ、観念の世界に没頭していった。寺院の中で真言（呪文）を唱え、印を結び、火を燃やして護摩の儀礼を行なうなど、秘法、秘儀によって功德を得ることを目指し続けていく。悩める人の苦しみを解決するために同苦したりしない。また社会の矛盾に立ち向かうこともしない。自己の悟達のみを追求し、現実変革の思想、すなわち民衆救済の実践を見失っていったのである。その結果、



ブッタガヤーの大菩提寺

密教が辿り着いたのは、釈迦の教えをまとめた経典を中心に修行するのではなく、秘術の彼方に悟りがあるという観念観法に陥り、架空の仏や本尊を立て仏教とは程遠い怪奇にして異様な教えとなっていた。

1203 年のイスラムにおける寺院攻撃の前に、すでにその仏教精神は失われ形骸化していたのである。仏教寺院には、莫大な金銀財宝があったが故に、イスラムの標的になったのである。金品を所持しなかったヒンズー教やジャイナ教は何の攻撃も受けずに生き残り今に至っている。なお、一部の覚醒した仏教徒、たえず時空を超えて釈迦の教えの本質に迫ろうとした僧侶たちは、東方に移動し、今日のバングラディッシュに仏教王国を築きひとときの命脈を保ち、仏教最後の華を咲かせていたのである。

スリランカ、初期仏教の光芒

仏教はアショーカ王の時代にスリランカに伝わり、上座部仏教として歴代王朝の庇護を受けてきた。仏滅後、100 年頃、教団の戒律を厳格に守る人々で、人数は少なかったが老僧が多く、上座に座るので上座部と呼ばれた。上座部の仏教徒はコルカタから船でベンガル湾を南下してスリランカに上陸し、布教に励み仏教を広めた。支配者たちの支持を得て、ミャンマーやインドネシアやタイ、またカンボジアやベトナム方面にまで伝わったので、南伝仏教ともいう。言うならば、東南アジアの仏教徒にとっては、スリランカは仏教の重要な中継地であり生命の故郷のような存在であ

った。

私がスリランカを初めて訪ねたのは、2014 年 2 月であった。国民の 70 パーセントが仏教徒というだけあって、行く

先々の道路の十字路には、等身大の釈迦座像が祀ってあった。島内には仏教遺跡が多くあり、1 カ月や 2 カ月では参観できないので、主たる旧跡を前もって調べて出発した。

ところで、スリランカはイギリスから、1948 年 2 月、セイロンとして独立、その後、1972 年にスリランカ共和国となった。1978 年にスリランカとなり、人口は約 2030 万人である。なお、



スリランカのポロンナルワのサトゥマハル・ブラサーダ。12 世紀に造営された



ポロンナルワ遺跡群の中心のクロドラングルのワタダーゲの仏像

スリランカという名称はシンハラ語で「スリ」は「聖なる」とか「高貴な」、「ランカ」は「美しいこと」の意である。スリランカに伝えられた言語は、前3世紀頃成立したといわれるパーリ語であるので、仏典はこの言語で書写されているものが多い。

スリランカの起源は前6～5世紀頃、北インドから移り住んできたアーリア人の末裔と称するシンハラ族の獅子の子孫と自称するヴィジャヤ王が、多くの家臣を連れて上陸し、先住民族のウエッタ人を征服してこの島にシンハラ王朝を開いた。シンハラ族は仏教徒となったが、前2世紀の前半には、インド半島の南端からヒンドゥー教徒のタミル族やムーア族が侵入してきた。この宗教対立は後世まで続くことになる。

スリランカの民衆に仏教が受け入れられたのは、前243年、アショーカ王の息子のマヒンダとその妹のサンガミッターの尽力による。国王は仏教に帰依してスリランカで最初の寺院である大寺を寄進し、今ではスリランカの上座部の拠点となっている。仏教はシンハラ族のドゥッターガーマニー王の治世に国教となり、各地に寺院が建立された。ヴァッタガーマニー・アバヤ王は無畏山寺を寄進している。この寺を中心に一時、大乘仏教が興隆したが、12世紀には小乗仏教徒は恐れをなし、長老会議で、以後、大乘仏教を信仰してはいけないと決議した。そのため、スリランカは小乗仏教一色の国となったのである。

私がスリランカの仏教遺跡で一番心惹かれたのは、中部の古都ポロンナルワにある高さ4.6メートルの7世紀頃の仏陀の座像である。同行した大阪教育大学の犬童徹名誉教授は画家だけあって、この巨大な一枚岩に刻まれた座像を真剣に点描され、帰国後は展覧会に出品され高く評価されていた。なお、この地は10世紀末、南インドのチョーラ王朝の攻撃によってアヌラーダブラを迫られたシンハラ王朝は、1017年から1255年までポロンナルワを首都とした。歴代のシンハラ王は仏教の普及に力を注ぎ、この町を仏教都市として発展させた。



スリランカにある世界遺産のシーギリヤ・ロック。この山頂に5世紀後半、11年間だけカーシャパ王が宮殿を築いて住んだ

高度な技術で作られた仏・菩薩及び僧院を荘厳する壁画や土台などの浮彫は、芸術性が高く実に素晴らしいものがある。たとえば、サトゥマハル・プラサーダと呼ばれる浮彫の仏塔は、青い苔につつまれ今にも崩壊しそうであるが美しさはこの上ない。なお、7層の石塔の各階4面の仏像は、12世紀のタイの僧侶が彫ったものといわれる。全長15メートルの涅槃仏もある。御影石でありながら枕はふくよかである。足のつま先は死んだことを証明するために、左右の親指を少しずつ前後にずらして作られていた。

その仏師の妙なる技法に、私はただただ感心するばかりであった。

森の中にそびえ立つ山上の城も参観した。古代都市シーギリヤである。5世紀の後半、平民出身の母をもつカーシャパ王は父のダートゥセーナ王を殺し王位についた。カーシャパ王は血統の良い母をもつ弟のモッカラーナに王位を奪われるのを恐れ、シーギリヤの切り立った高さ 195 メートルの岩山の頂上に宮殿を建設した。しかし 11 年後、インドに亡命していた弟の攻撃を受け天空の城は落城、王は自ら命を絶った。その後、王宮は仏教僧に寄進され、弟は首都をアヌダープラに戻した。

私は山頂に登り大浴場や宮殿の遺構を調査、王は弟の攻撃を恐れて山城を築いたのは間違いないが、それだけではなく、この世界を支配したという幻想に取りつかれたと思う。併せて、実の父を殺したという懺悔の念を振り払うかのように、狂気に満ちた欲望を充足させようとして、冷気に満ちた崖上に君臨したのである。天上に住む伝説上の妖精アップサラとその侍女たちを、脚下の岩肌に描かせたのも、その精神構造の発露といえる。



1875 年イギリス人によって発見された壁画。5 世紀に描かれたフレスコ画、シーギリヤ・レディが今も 18 人残っている

スリランカを代表する芸術、美しい女性を描いたフレスコ画には、500 人ほどの女性が描かれていたという。今は 18 人しか残っていない。1967 年のバンダル人の攻撃で剥がされたり、風雨で浸食されてしまったからだという。

スリランカの面積は北海道より幾分か小さい。しかし気温は平野部で年間平均温度 26 度、山間部では 24 度、海岸部では 29 度であるから比較的過ごしやすい。今は政治も安定し、居住、信仰の自由もあり、紅茶産業も順調で平和の楽園として世界から注目されている。

スリランカを離れる時、私は後ろ髪を引かれる思いがした。限られた時間ではほんの一部の遺跡しか見学できなかったからだ。いつの日か再びこの島を旅して、さらに仏教初期の残照を見定め、その 2000 年の歴史に思いを馳せたいと、心ひそかに願いながら機上の人となった。

天空の王国、ブータンの光と影

2015 年 5 月、バングラディシュのバハルプール仏教寺院遺跡群を調査したあと北上し、初めてブータン王国に入ったのは、2015 年春であった。紅茶で有名なインドのダージリンから車を走らせ、首都のティンブーに向かった。途中、チュカからワン・チュ川をさかのぼり、チュンム、カサダブチュ、シムトカ、ドチュ・ラを經由してティンブーに入ったのは深夜だった。海拔 2500 メートルの高所から眺めた

星空の美しさには驚嘆した。まさに雨ふるがごとき、真珠の玉手箱のきらめきを放った天空だった。都会で育った私にとっては、まさに万金に値する夜空であった。私は車を停めて、小さな薄暗い粗末な山小屋の底に入って何度も頭を上げた。美しい銀河や星のまたたきは筆舌に尽くせぬ華麗さだったからだ。その感動は今でも私の胸中に脈動しており、忘れえぬ思い出の一コマになっている。



ブータン西部の町、パロの郊外にあるタクツァン僧院。標高 3200m の急峻な山肌に張りつくように建てられている。チベットからブータンに仏教を伝えたパドマサンパバが建立したと伝えられている

ブータンには高層ビルは無く、町や村も整然として統一した景観を醸し出していた。特に、壁の色や屋根の形などはほとんどどこも同じであった。墓地が無いので現地の人に尋ねてみると、火葬したあとその骨は全部河川に流すそうである。人間は自然から生まれたのだから、死んだら自然に帰るのが一番良いとの返事だった。

ブータンでは崖上から王宮を眺め、民家を訪問して民族舞踊を見た。さらに一般家庭を訪ね、台所や寝室、仏間などを参観したが、仏壇の立派さには驚いた。国民の生活の中に仏教が深く入り込んでいた。年に 2 回、僧侶がやってきて祈ってくれるそうだが、その家の経済力にあわせて、僧侶の来る

人数もお布施も決まっているという。平均すると 7～8 人ぐらいの僧がやってきて祈祷していくという。お布施は中心者が日本円で 1 万 2 千円ぐらい、それから位が下がるたびに低くなり、最後の僧は 8 千円前後だと語っていた。村落共同体

であるから私の家には来て欲しくないとは言えない。どの家もお布施・供養のために僧侶に金銭を支出することに苦労しているようだった。

ブータンに仏教を弘通したパドマサンパバゆかりのタクツァン僧院を訪ねた。ブータン西部の町、パロ郊外にある。急峻な崖を、海拔 3200 メートルまで歩いて登った。8 世紀に建てられたタクツァン僧院は、1998 年に不審火で全焼したが、その後 2004 年に再建され今日に至っている。瞑想し修行する僧侶し



ブータン王国のパロにあるキチュラカン仏教寺院。ブータン最古の寺院（7 世紀）で、ソンサンガンボ王によって建てられた

かないのに大火災だったことを聞き、私はふと京都にある金閣寺炎上を思い出した。

大空に向かって垂直に切り立った岩壁の寺院の前には、落差150メートルほどの滝が流れ落ちていた。まさに絶景である。大地震が起きたら僧院は谷まで崩れ落ちひとたまりもないと思った。

ところで、ブータンは新しい国である。ブータンの国名の由来には諸説がある。サンスクリットの「高地」、または「雷龍の国」とか、「龍王の国」の意もあるという。1907年、ワンチュク家が支配権を確立しブータン王国となった。今のワンチュク国王は2005年に即位、立憲君主制移行を表明し、現在は国民民主党が過半数を獲得している。

ブータンは殺生を禁じているので牛肉も魚もインドから輸入している。今、ブータン社会はゆるやかな岐路に立たされている。僧侶になったが村の娘と恋仲になり、還俗する者もいるという。チベット仏教の流れをくむブータン仏教の中心は、密教である。ラマ教と呼ばれたこともある。宗教の正邪は別として、前述の如く僧侶の大量出現は、純粋な民衆から限りなく蔓延を続けている。それでも民衆は決して表立って不平は言わない。なお、仏教と政治が非常に緊密な関係を保っていて、政府の建物と寺院が一体化しているような状況であった。それは王家と仏教に連結しているので、近代化や真の民主主義とはほど遠いものとなっている。ただ、幸せなことは、仏教信者が国民のすべてといってよい。イスラム教の浸透する余地は全くないといえる。

私がブータンを訪問する前、その国の政治や経済、また宗教などを調べていたところ、一番関心を抱いたのは国境問題であった。ブータンはインドとは良好な関係で、観光にはビザ等は必要なく、ブータン国民がインドに出稼ぎに行くのも自由であった。しかし、中国とは国境画定作業が進行中であった。近年はブータン国内に中国が勝手に入国し、道路を建設したりしている。越境行為も頻繁に行われていた。驚くことに、以前は国土の面積が46500平方キロメートルであったが、今は38400平方キロメートルになっている。チベット方面の領土が、中国領とされてしまったのだ。ブータンは海軍も空軍も存在せず、航空機は8機のみ、軍隊より僧侶の方が多く国である。無防備の国の発言は弱く、これからもブータンの領土は年ごとに侵食されていくものと推測される。

ところで、ブータンの主な収益は水力発電によるインドへの売電収入と、観光収入とのことであった。観光客で1番多い国はアメリカで、日本は年間3000人程度で2番目だった。車の中古は輸入しないとのこと、そのため車はどれもきれいであった。信号機はない。おとなしい従順な国



ウズベキスタン南部、テルメズ郊外にあるフアヤズ・テパの遺跡からの完全な形で出土した三尊仏像

で平和な天空の国であった。

サマルカンドは民族興亡の十字路

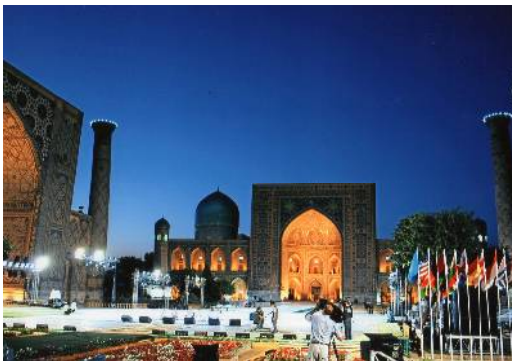
大学の夏休みを利用し、中央アジアの古代遺跡の調査に向ったのは 1998 年夏のことである。まず、キルギスに入った。唐代の詩人、李白の故郷のトクマク（碎葉）の調査の折、漢字が刻まれた瓦が出土しているのは驚きであった。唐の初め、長安での権力闘争に敗れ、遙か西方のキルギスまで逃亡した李一族が、集落をなして住んでいた町でもある。

キルギスのタラス河の古戦場では、751 年、5 万人対 5 万人で戦った唐とアッパース朝、仏教徒とイスラム教徒との大激戦に思いを馳せた。さらに北の山中に向い、仏教の最北伝の地ともいふべき、高さ約 2 メートルの石刻の観音像も調査することができた。

次いで、ウズベキスタンを訪ねた。李白が「^{こ き}胡^{かんぼせ}姫の 貌 花のごとし」と歌い、^{げんしん}元^{こじん}槿が「^{こじん}胡人 女を



ウズベキスタンのアルク城壁の上から見たブハラ市内



サマルカンドのレジスタン広場の夜景

献^よず 能^{こせん}く胡旋す」と詠んだ胡人の故郷の一つであるサマルカンドは、イラン系のソグド（粟特）人が住んでいた町である。中国の史書『新唐書』は、この町を「^{しんとうじょ}康国」と記している。

ソグド人は隊商貿易で活躍し、中国では雑胡とか、^{こ こ}賈胡などと呼ばれていた。莫高窟から出土した「沙州敦煌二十詠」によれば、敦煌郊外に^{ほこら}拜火教の祠を建てている。ウズベ

キスタンのアム河とシル河に挟まれた地域を本拠地とし、その商売の範囲は、西は地中海沿岸、一説にはスペインまで、東は中国の太平洋の沿海まで及んでいる。

ソグド人は7世紀から10世紀の間、世界各国に安城という居留地（集落）を持っていた。他からの攻撃に耐えられるように、一つの集落には約300名、多いところでは1000人ほどが住んでいる。集落は倉庫になり、情報拠点基地にもなり、また、宿泊施設にもなるのである。

歴史の町ブハラは、「ブハーラー」とも言い、古代インド語のサンスクリットでは、「僧院」の意である。中国ではブハラ出身の者は「安」の姓を名のっていた。安史の乱の時に活躍した安祿山もブハラ出身の雑胡である。彼らはウズベキスタン南部、及びタジキスタン地域からなるクシャン朝（貴霜）の支配に属し、1世紀から3世紀にかけて民衆の一部は仏教を受け入れている。

「東方の真珠」との異名を持つサマルカンドやブハラは、シルクロードのオアシス路の重要な町であった。玄奘は『大唐西域記』にその発展ぶりを、「住民は多く、異国の珍しい物品が多く集まっている」と記している。この地方は8世紀にはアラブ、13世紀にはモンゴルに破壊されている。しかし、サマルカンドは、14世紀後半には復興し、その美しさから訪れたキャラバンをくぎ付けにした。16世紀初頭までシルクロードの中心都市として栄え、そびえ立つ壮麗な建造物は、インダス川から黒海にいたる地域を版図にしたティムール帝国の都となり、イランとトルコとモンゴルが融合した新しい文化が栄えた。



中央アジアから長安にやってきた
胡商の俑

この時期、青タイルに彩られた建物が多く造られた。女性は赤・黄・緑の、まるで万華鏡の

ような極彩色の衣装を着ている。空に屹立するドーム、鮮やかな輝きを保つ工芸品、帝都に花開いた高度な文化の光彩、私はその美意識の中に輝ける異文化の光彩を見た。いや、異文化というよりは人間の心の奥底に流れる文化と平和を愛する生命の脈動を垣間見た思いがした。なお、異文化というと、まだ相手と自分、文化と文化の差異を認めていることになる。そうではなく民族、体制、イデオロギーの壁を超えて、人間万人が持つ普遍性に英知の光を照射する

ウズベキスタン方面から長安の都に
やってきた舞姫は、白楽天により胡
旋女と名付けられた

ことこそ、真の共存の原動力になるのではないかと思う。人間と人間の心を連結させる精神のシルクロードの構築こそ真の平和の要諦であると確信する。

なお、2013年8月、ウズベキスタン共和国伝統の第9回国際音楽祭が、ユネスコの支援のもとサマル



ソグド王の即位を祝う使節（アフラシャブの丘出土）

カンドのレジスタン広場で開かれ、私も出席した。各国の代表が民族芸術の粋を披露していた。この音楽祭は 1997 年から始まっていた。2015 年 8 月 25 日から 30 日まで、第 10 回の音楽祭が盛大に開かれ、芸術文化の華を咲かせた。ところで、ソグド語写本文書の中からうかがえることは、ソグド人はゾロアスター教（拝火教）を信仰していたが、同じ地域に仏教やキリスト教やマニ教を信じていた人

がいたこともわかった⁹。ソグド人が多く住んでいたサマルカンドのアブラシャブ都城址から、菩薩像や仏教関係の遺物も出土していることからこのことは証明される。敦煌やトムシュクでは仏教寺院の近くにゾロアスター教の寺院も並んでいた。

ところで、ブハラのモスクを参観した時、現地の研究者は、「このモスクは建造して 1400 年も経ったので、土台が腐敗しはじめた。修復作業を行っていたところ、地下から仏教寺院が発見された」と話してくれた。私はさっそくモスクの地下を調査、その中で約 45 平方メートルほどある寺院の基壇部分を確認した。景勝の地に仏教寺院はあったので、イスラムは寺院を破壊したあと、その上に新しくモスクを造営したのである。

出土する文物の文化層からわかることは、サマルカンドやブハラの仏教は、10 世紀中頃に滅亡したことだ。751 年、唐がキルギスでアッパース朝に大敗してから、中央アジアにイスラムが浸透していく。しかし、仏教はタラスの敗戦以後も、約 200 年にわたって中央アジアの各地に信仰の灯を守り続けていたのには驚いた。

この地に、イスラム教を信ずるウマイヤ朝が誕生してから、イスラム化が本格的に進んでいった。仏教徒には、税金という名のもと、経済的な締め付けをかけた。敬虔な仏教徒は貧しくとも仏教を守護しぬいたが、子から孫へと世代が推移するにつれて、いつしか信仰心も薄くなり、やがて仏教は自然に消滅していった。なお、今日ウズベキスタン芸術研究所に展示されている 2～3 世紀頃の菩薩像胸部、釈迦如来頭部、そして仏手断片や菩薩立像、塑像断片などから、3 世紀から 8 世紀までの中央アジアの仏教の繁栄ぶりを見ることができる。

ブハラは、9～10 世紀にサーマーン朝の、また 16 世紀からブハラ・ハン国の首都として栄え、366 ものイスラム神学校があった。今でも中央アジアにおけるイスラム教学の中心地として、宗教都市の性格を帯びている。この地方は、アレクサンドロス大王やモンゴル等の攻撃で、合計 12 回にわたって建設

⁹ 上掲注 8 参照。

と破壊を繰り返してきた。今日、その戦場跡に立つと、民衆の嘆きと悲しみが伝わってくるようだ。改めて、戦争の悲惨さと平和の尊さを感じた。

歴史とは、現代の叡智で過去の出来事を照射し、そこから未来への指針を見出すものだ。対立から協調へと時代を転換し、ビジョンを示すことだ。私はこれからも、人間の歴史舞台であるシルクロードの研究に励み、その中から平和への指針を求めていくことを決意している。

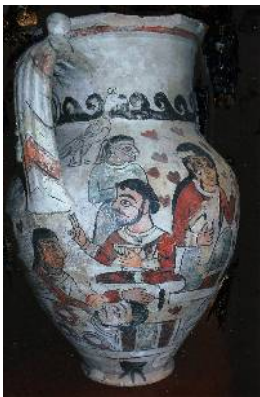
トルクメニスタンのメルヴは仏教最西端の町

ウズベキスタンのサマルカンド、ブハラを経由して、アムダリア川を渡りトルクメニスタンのマーリに着いたのは、2013年8月であった。そこから東へ30キロ、世界遺産メルヴ遺跡は流沙の中に林立していた。かつてはシルクロードの重要な中継都市として栄え、ペルシアと中央アジアを架橋として多くのキャラバンが往きかっていた。アケメネス朝、セシウコス朝を経てパルティア帝国からササン朝までのみならず、7世紀末にイスラム化したあとのセルジューク朝、サンジャール朝時代においても繁栄した。



ギャウル・カラ都城址の近くにある小キズ・カラから見た大キズ・カラ。かつては高さ20m近くあったと考えられる

セルジューク（11～12世紀）に建てられた



メルヴ写本「説一切有部」が入っていた彩画のある壺

スルタン・カラやサンジャール廟は、歳月による風化や地震にも耐え抜き、今日その建築技術の高さを見せてくれる。なお、数学史にもその名を刻んでいるオマル・ハイヤームも、メルヴの天文台主任として活躍していた。首都のスルダン・カラの東西には、キズ・カラ（乙女の城）と呼ばれる大小2つの城跡が残り、高さは20メートル近くあったと考えられる。かつて凸凹の城壁に囲まれた城内は、幾つもの室に分かれ、王のスルタン・サンジャール（218～257）は、このキズ・カラの中で町の興隆を祝賀し、歓楽を尽くして酒宴を繰り広げていたという。城壁に登って四方を見渡すと、古跡累累として廟や丘陵が点在し、その彼方には放牧されている牛馬がゆったりと移動していた。王城を守護するかのようになり、外壁は高さ7～8メートルの長城で包囲されていた。なお、メルヴ遺跡

は中央アジア最大の仏教遺跡といわれるだけあって、ギャウル・カラ都城址を中心に、仏教関係の文物が多く出土している。たとえば、トルクメニスタン国立博物館には、メルヴ写本が入っていた彩画のある壺や、ガンダーラ仏の影響を受けた金箔の残る玄武岩の石仏もある。

メルヴの仏教寺院群は風光明媚な高い丘の上にあった。仏殿の壁画を飾ったレンガはまだ緑色の顔料現地調査をして考えたことであるが、仏教流伝の最西端の地とメルヴはいわれているが、あまりにも多くの仏教関係の遺物を前にして、私はメルヴまで西伝した仏教が、急にこの地において流伝が中断したとは思えない。更なる仏教伝来の痕跡はないかと、アシガバットの西約15キロ、コベット・ダク山脈の麓にあるパルティア帝国初期の首都の遺跡ニサを調査した。仏教関係の文物は発見されなかったが、現地で出版された書籍に「仏教文化の影響を受けた文物が発見された」と記されている一文を見つけた。今後、それは具体的に何であるのかを確認する予定である。もしもニサ出土の仏教関係の遺物であるならば、仏教伝播の歴史を書き換えることになる。



ガンダーラ仏の影響を受けた玄武岩の石仏。金箔の一部がまだ付着している



メルヴ出土の首のない仏像。イスラムの侵入によって仏教徒が逃亡する時、「仏の生命は頭に宿る」と思い、首を切って東方に持ち去ったと考えられる

ところで、ガンジス川の中流域で興った仏教は、前3世紀に出たマウリア王朝のアショーカ（阿育）王（在位前268頃～前232頃）の尽力により、世界宗教へと発展した。釈迦の説いた教えは仏典の結集^{けっじゅう}として、次第に文献として整理されていった。しかし、「如是我聞」（我れ是くの如く聞けり）として経典が編集されはしたもの、主流は師匠から弟子へと、一文一句たりとも誤りのないよう口伝されていたが、釈迦滅後、約400年後、やっとガンダーラにおいて文字として統一的に書写され、大蔵経として成立したのである。初めはガンダーラ語で書写されたが、後にサンスクリット（梵語）が主流となる。ガンダーラでは経典が完成しただけでなく、仏像も誕生した。それ以前は法輪や菩提樹や仏足を拝んでいたが、初めてガンダーラで人間の形をした釈迦や菩薩が出現したのである。

最初はギリシア風のガンダーラ美術であったが、各国に流伝するうちに、その地域の住民の顔によく似た仏像が造られるようになった。メルヴの仏頭や仏像も現地人の容姿が色濃く反映されていた。

パルミラ、女王が支配した砂漠の王国

平山郁夫画伯の作品に、「月域月彩」がある。シリア砂漠のほぼ中央にあるパルミラ遺跡と、そこに浮かぶ満月を描いた作品である。遺跡と月光、廃墟に流れる光芒、孤愁の美意識とノスタルジアの漂う名作である。

思い返せば、私の通った笠寺小学校も本城中学校も城跡であった。信長や秀吉や家康が活躍した歴史舞台、すなわち尾張と三河の中間の地、桶狭間の古戦場も近くにある。

通学した小学校は、織田信長の家臣が築い



パルミラの野外劇場。観覧席は13段、舞台は幅48m、奥行きは10m余あった



唐の時代、ペルシア方面から多くの貴族が長安に亡命。そのため異国情緒あふれ、テンポの速い歌舞が都でもてはやされた。白楽天の「胡旋女」を想起させる舞

た本格的な城で、星崎城と呼ばれていた。城門に入る石段を50段ほど登ったところに、校庭と教室があった。クラブ活動や図書館を利用して遅くなると、友達と語り合いながら、苔むす城壁に降りそそぐ月光を眺めながら帰ったものである。

ところで、『李太白詩集』の「長安一片の月」の詩境に心引かれて、大学や大学院時代は唐の詩人・李白を専攻した。その李白が夢見た砂漠の彼方のオアシス、パルミラ遺跡に足を踏み入れたのは、2007年秋のことであった。

パルミラは、シリア砂漠の中央にあるオアシスで、ギリシア語の「ナツメヤシ」を意味する「パルマ」に語源を持つといわれている。また「タドモル」とも呼ばれていたが、これも古代セム語のナツメヤシから名付けられたという。町の起源は古く、前19世紀から早くも集落ができていた。伝説によれば、ヘブライ王国のソロモン王によって建設されたという。

パルミラは、シリアのダマスカスの北東約230キロにある。前1世紀

中頃から中国とヨーロッパを結ぶシルクロードの商業都市として栄え、2世紀から3世紀にかけて、繁栄の頂点に達している。しかし、ローマ軍による破壊と、1000年ほど前の大地震により、町は完全に廃墟となっていた。土石累々として果てしなく広がるパルミラの規模の大きさに、私は言葉を失った。往時のパルミラは、現在の遺跡の3倍以上あったという。今まで訪ねた楼蘭やトルファンやカシュガルの古代遺跡は、ほとんど日干し煉瓦で作られていたので、今では土に還っているところも多い。しかし、パルミラの建造物は石造り遺構であるので、戦乱や地震で破壊され長い歳月を経ても、往時の有様を彷彿とさせ、その残照は訪れる人の心をとらえて離さない。

私はまず、記念門（凱旋門）の文様や、コリント式の150本の列柱に刻まれた文字を調査した。次いで、西暦32年に創建されたベル神殿の建築様式を調べた。入口に倒壊した石柱があったので、その下にもぐりこみ、砂の上に寝転んで柱の裏面を調査したところ、幅1メートル、長さ3メートルほどにわたって彩色の浮彫があるのに気付いた。それは、翼をもった少年が、天馬に乗り移ろうとする姿で、その躍動感に満ちた作品に心打たれ、横たわったままシャッターを切った。その他、住宅街や神殿や劇場や古代の水道管なども調査することができた。特に、郊外にある墳墓の装飾は芸術性が高く、パルミラ王国の文化水準の高さをよく示していた。

2世紀にはローマは、パルミラに通行交易税の徴収など、広範囲な自治権を与えていた。しかし、西暦267年、首長オダイナトが暗殺されると、妻のゼノビアは実子を王位に就け、自らは摂政として全権を掌握した。実質的な女王として君臨したゼノビアは、領土を大きく広げ、大軍を率いてエジプトに駐留するローマ軍を打ち破った。そのため、ローマ皇帝のアウレリアヌスは、大軍を率いてパルミラを攻撃、272年ついに、ゼノビアは捕らえられ、町は徹底的に破壊された。「一国は一人によって滅ぶ」とい



パルミラ城内の水道管

われるように、流砂に咲いた一輪の花は、一人の女性の限りなきおごりと欲望によって、繁栄の幕を閉じ、終焉を迎えたのである。

なお、パルミラ博物館では、漢代の精巧な錦や、漢字の入った綾を見た。これは明らかに、絹が長安の都からパルミラまで伝えられたことを証明、私が楼蘭故城で見た織物類と、色彩や織り方が類似しており、シルクロードの連結した交易を物語るものであった。

こうしたパルミラ遺跡は、今、過激派組織イスラム国によって次々に破壊されている。管理人もいなくなり、略奪と破壊の限りが尽くされている。また現地の老研究者も民衆の前で首を切断された。2015年8月30日には、パルミラ遺跡の象徴的な存在であるベル神殿も破壊された。神殿は1～2世紀ごろに建設された古代ローマの建築様式を受けついだ遺構で、

イスラム教が広がる7世紀以前の多神教の神々を祀る神殿だったことから標的となった。宇宙衛星の画像を見たところ、正面の門柱の一部を残すだけで、神殿は完全に破壊され土塁となっていた。

思えば、ローマ世界と東方との交易の接点として栄えたパルミラ、ペルシアとギリシア、そして、ガンダーラの影響を受けた美術作品の数々、まさに、パルミラは異文化共存の宝庫であった。私はパルミラを離れる前夜、一人宿舎を出て月光に輝く記念門と列柱道路を写真に収めた。

パルミラ遺跡の上空に輝く満月、何と美しいことであろうか。心に残る言いようのない感動に涙がにじんできた。あらためて自分が選んだ人生の道に悔いはないと思

った。まさにシルクロードは、人はどう生きるべきか、正しい人生とは何かを考えさせる滋味あふれる天地である。ふと、岑参の「やや辺城夜夜しゅうわ愁夢多し。月に向って胡笳こか 誰か聞くを喜ばん」の一節が脳裏に去来した。もしもまた、再びの人生があるならば、私は同じ人生、同じシルクロード研究の道を歩みたいと思った。

2015年5月、パルミラはI S（自称『イスラム国』）に制圧された。30年以上パルミラ遺跡で博物館の館長を務めていたハイド・アサド氏が同年8月、I Sに首を切断され、その生首は遺跡の柱に吊るされた。

アサド氏は1934年生まれ、ダマスカス大学で歴史学を学び、古代パルミラ文字も解読できる世界的な学者であった。I Sが侵攻してくる直前、パルミラの神像など数百点を地方に移した。アサド氏は捕えられ隠し場所を言うように尋問を受け続けたが、ついに口を割らず殺された。



一度に70人が入れるローマ時代のボスラの大浴場跡



パルミラの夜の記念門と列柱道路。満月が煌々と輝いていた

パルミラ遺跡の保存のための志を貫き、命を捧げた81歳の老学者に、心から哀悼の意を表したい。

シリア、古代都市ボスラの月彩

シリア砂漠のダマスカス南方140キロのボスラの町を踏査したのは、2007年10月であった。ヨルダン国境から40キロ北に位置する

ボスラは、シリア南部のハウラン地区の中心都市である。エジプト第18王朝の頃は、ブラナスと呼ばれ、遊牧民出身のナバテア人の一大拠点であり、キャラバンサライとしても繁栄していた。前4世紀、アレクサンドロス大王の東方遠征の時、その支配下に組み入れられたり、また、ローマのセレウコス王朝の軍門に下ったこともある。前1世紀、ナバテア王国の北都となると、その地理上の重要性から東西交易の中継都市として、大いに栄えることになる。西暦106年、ローマ帝国のトラヤヌスの軍がシリア南部からヨルダンに來襲、ナバテア王朝は滅亡した。ボスラはローマ帝国の翼下に入り、アラビア属州の州都として賑わいを見せることになる。次のハドリアヌス帝（在位117～138）の治世になると、さらに経済力が向上、このローマ支配による平和な時代に、シタデル・ローマ劇場が完成した。半円形の幅は、120メートル余もあり、5000人の観覧席と3000人の立ち席がある。建築技術の優秀さもさることながら、音響効果が優れているので、今でも演奏会などで使用されている。

私は堀の架橋を渡り、正門から劇場内に入った。1階の回廊から最段上まで歩いてみたが、劇場というより、難攻不落の一大要塞といった印象であった。黒茶色の玄武岩が積み重ねられた堅固な石段を登り、劇場の中腹に出てみると、場内が一望できる雄大さに目を見張った。さらに屋上に出てみると、そこにはローマ時代の浮彫や石柱や人物像が90点ばかり展示されていた。その中でも、特に私の関心を引きしたのは、80個あまりの直径30センチの投石用の石弾である。この円形の石弾は、十字軍が奇襲したら、30メートル余の屋上から転げ落とすというものである。

かつて私は、ウズベキスタンのサマルカンドやブハラを調査した時も、同じように屋上に石弾が山積みされているのを見たが、いずれも直径20センチほどであった。しかし、ここはそれよりも大きく、その破壊力は想像を絶するものがあつた。



明るく元気なボスラの子どもたち

次いで私は、ボスラの市街地に入り、まずローマ帝国時代に造営された大浴場に向かった。ローマ皇帝の名にちなんで、カラカラ浴場と名付けられ、入り口に通じる石畳の列柱の道路の幅は約6メートルもある。両側には高さ7メートルのグレコ・ロマン風の円柱が整然と林立している。いずれの柱にも上部には植物模様の彫塑が美しく残存していた。

大浴場は^{ようどう}甬道から着替え場に、そして、洗い場には大きな湯船の跡がある。一度で70人前後は利用できる大浴場で、南部の傾斜を利用して、石畳で組んだ湯道が5メートルほど確認できる。朽ち果てているとはいえ、浴場の屋根の高さはまだ13メートルあまり残っていた。その設計の精巧さに驚き、古代人の建築技法の高さを思いやった。ボスラを訪れた各国の商人たちは、この浴場で旅の疲れを癒し、ひとときの安らぎを得たことであろう。

市街地をくまなく巡り歩いてみると、ビザンチン様式の家が建ち並び、古代の建物の中に灯りがとも

り、今なお人々が生活しているのには驚嘆した。遺跡のレンガの一部を切り取って石段の上の飾りにしたり、植木の台にしている。まさに古代と現在が混然と息づいていたが、シルクロードのルート変更により、13世紀頃からボスラは衰退していった。

ボスラ滞在の最後の日、広場に出てみると、10人ほどの幼な子が、私のもとに駆け寄ってきた。突然の東洋人の来訪に大喜びしている。一人ひとりの髪や目の色、そして肌の色の違いは、この町が民族の十字路であったことを如実に証明している。私は思わずその可憐さに魅せられて、シャッターを切った。そして、ポケットに入っていたチョコレートや菓子を全部わたすと、みなこぼれる笑顔で受け取った。

夕刻、6時を迎えた頃、夕陽は孤城に美しく輝き、廢墟に浮かぶ明月は幻想的であった。ローマ時代の住人もこの月を眺め、町の繁栄を喜び、人生を謳歌していたことであろう。まさにボスラは悠久の時を経て今なお光彩を発散させ、人々に人生の妙味と平和の尊さを実感させる歴史舞台であった。

ヨルダン、ペトラ遺跡を想う

地中海東岸から内陸部にかけて、古代都市が多く分布しているが、これらの都市は、シルクロードの交易路と密接に関係している。ローマ帝国との勢力関係や異民族の侵入などによって、その都市の興亡は複雑な様相を呈して推移変転している。

そうした中、ひととき異彩を放った隊商都市がある。ヨルダンのペトラ遺跡である。ペトラとは、ギリシア語で「崖」を意味する。死海から約80キロ、奥深い溪谷にあり、守るにふさわしい自然の要塞であった。先住民族のエドム人を南に追いやったナバテア人は、砂漠を越えてやってきたキャラバン隊の中継地にふさわしい首都、ペトラを築いたのである。

特に、大雨によって濁流と化す溪谷にダムを設置したり、町に水道管を張り巡らして給水システムを完備させるなど、すでに前2世紀頃には治水工事も完成させた。また、精神の尊さや宗教的美意識を形で表現し、大きな神殿や荘厳な建築物を構築している。

2008年11月、私は仏教西伝の最果ての都市を見定めるため、ヨルダンの首都アンマンから190キロほど南の山岳地帯にあるペトラの浮彫を調査、岸壁に彫られた浮彫の人物像や動植物を調べた。特に、シクとよばれる断崖の間の細い道の西側を念入りに調査した。ガンダーラ地方に移住したギリシア人の中には、後に仏教徒になった人も多くいたからだ。しかし、パルミラもダマスカスも、そしてヨルダン



ペトラ遺跡のエル・カズネ

のペトラにも仏教流伝の痕跡は全く無かった。最西端はトルクメニスタンのメルヴまでであることがよくわかった。地中海東岸の文化はギリシアやローマの影響が強く、仏教を東方の一つの思想にとらえ、宗教としての視座を抱いていなかったようである。ギリシア・ローマの人間凝視の思想が深遠で、そのためすぐに仏教を受け入れる必要性を感じなかったことによる。しかし、近年になってギリシア哲学やキリスト教の世界から仏教徒になる人々も増えているという。仏教西漸の版図は、近い将来塗り替えられる可能性が高い。



観光客を求めて、ペトラ遺跡をラクダが行く

ところで、ナバテア人は、前2世紀後半、ペトラに王国を築いた。人口も20万人を超え、交易により巨万の富を成し、隊商路に沿って支配地域を広めた。紀元後1年頃に、隆盛期を迎え、アレタス4世の時代には、その領土は地中海から南アラビア海にいたっている。しかし、西暦63年ローマの猛攻撃を受け、さらに106年には、ペトラも占領されてアラビア州に併合されてしまった。

しかし、ローマの支配下にあっても、ペトラはシルクロード交易の中継地として発展し続けた。西暦363年、この地方に大地震が発生し、建物は崩壊し隊商都市として機能しなくなってしまった。また、隊商ルートも変化しキャラバンも来なくなった。やがて町は放棄され、歴史の表舞台から姿を消し、その位置すらも分からなくなってしまったのである。

1812年、スイスの探検隊によって発見され、1958年にイギリスとアメリカの合同調査隊によって本格的な発掘がなされ、町の全貌が明らかになった。私は、砂岩の岩肌を彫って造られた宝物殿、エル・カズネを訪ねた。高さ30メートル余もあり、王国の国威を象徴する建造物である。断崖に彫られた高殿は、古代ギリシア建築の影響を受け華麗であった。内部に入ってみると、石柱や壁の細部まで美的な感性がみなぎっており、1700年前の活気に満ちたナバテア人の喧騒が胸中に響いてくるようであった。

しかし、今は静寂な廃墟が無感動に累々として横たわっているだけである。文化や文明は、歳月を積み重ねるだけでは決して発展しないことを、改めて思い知らされた。更に向上し発展するためには、住民の不斷の努力があってこそ可能である。安逸と墮落はいずれこの地にあっても、いずれの時代においても時空を超えた不変の道理といえよう。

ギリシア、アレクサンドロス大王誕生の地ペラの偉容

2005年夏、古代マケドニア王国の都ペラを訪ねた。アレクサンドロス（英語・アレキサンダー）大王の出生地である。彼が生まれた王宮跡には今でも多くの石柱が残存し、2300年前に敷き詰められた色とりどりの文様の石畳は、鮮明に夕陽に輝いていた。転倒した石壁の間からは、紫や黄色の草花が乱れ咲き、主なき古城を慈しむかのようにであった。ふと私の脳裏に、輝かしい戦果を収めて凱旋する若き日のアレクサンドロスの雄姿がよぎった。



アレクサンドロス大王の生誕地、ギリシアのマケドニア地方にあるペラ遺跡

アレクサンドロスは前356年にペラの王宮で生まれた。父のフィリッポス2世が、ギリシアの諸都市を服属させ、王国が発展している時期である。アレクサンドロスは生まれながらにして類まれな才能を持っていた。幼くして文武の二道に精励し、後の東征の精神的基盤をこの少年時代に構築した。

13歳の時、帝王学を身に付けるため、哲学者アリストテレスが招かれた。首都から西へ40キロほど離れたミエザの学問所で、学友たちと3年間にわたってギリシア文化の精華を学んでいる。遠征の折、略奪や殺戮を最小限に止め、また、決して女性に心を奪われることもなく、無謀な行動を取らなかったのは、アリストテレスの教育の成果といえる。

16歳の時、ミエザからペラに帰り、遠征中の父王に代わり、摂政としてマケドニアを統治している。20歳の時に、父王が側近の護衛官に殺されると、すぐに国王に即位した。

前335年、コリントス同盟会議で東征を決意すると、ヘレスポントス海峡を渡り東方への進軍を開始した。イッソスの海戦でアケメネス朝ダリウス3世のペルシア軍を破り、前332年にはエジプトへ侵攻している。

前331年、チグリス川を越えたガウガメラでペルシア軍と再戦、4倍以上の大軍を7000騎で打ち破った。翌年には、ペルシアの都のペルセポリスを占領し炎上させている。

ペルシア全域を征服した後、さらに東に向いウズベキスタンのサマルカンドを支配、ソグディアナへ北進する。しかし、地元民の反抗が激しく、ポリュティメトス川の戦いで敗北した。その後、進路を南に向け、バクトリアに進攻、さらに前327年、インダス川を南下、ガンダーラからパンジャブに入っている。この地方を統治していたボロス王は、200頭の象軍団をはじめ、騎兵など総勢3万で待ち構えていた。アレクサンドロスは、卓越した作戦で勝利したものの被害も大きかった。兵士はペラから1万6000

キロ以上の進軍をしてきたので、疲れ果て士気は落ちてしまった。やむなく帰還の途につき、アラビア海に出てからバビロンに戻り、前 323 年、この町で新たな遠征への出発を目前にして熱病にかかり 33 歳で死亡した。

ところで、私はペラ遺跡の調査を終えたあと、アレクサンドロスの息子のヘラクレスが、前 310 年、秘かにカッサンドロスによって水死させられたという河畔を訪ねた。権力欲に取り付かれたカッサンド



ギリシアのアカデミア。アレクサンドロスの師のアリストテレスはここで学んだ

ロスは、若きヘラクレスを視察のために王城の外に出ようと誘い、重い鎧をまとわせこの岸辺から突き落とした。アレクサンドロスの血統は、ここに断絶した。濃い緑の萌える土手に挟まれた 10 メートルにも満たない川幅、美しい溪流が何も知らぬげに流れていた。

アレクサンドロスは征服した各地に、アレクサンドリアと名付けた町を 35 以上建設している。これらはギリシア文化の東漸の拠点となり、ヘレニズム

文化の形成に大きな役割を果たした。

ところで、西北インドには、次々とギリシア人が王国を築いていった。土着の文化を排除するのではなく融合させ習合していった。その寛容性は、東西文化を共存させ発展させるという結果をもたらした。バクトリアの王でインドに移ってきたミリンダ王（メナンドロス）は、仏教の哲理に感銘し信徒になって、その保護に力を注いだ。なお、ミリンダ王と高僧との問答は、仏教とギリシア思想の交流の記録として漢訳され、「なせんびくきょう那先比丘經」として日本にも伝えられている。また、貨幣にも表にギリシアの神像、裏には仏教を象徴する法輪を刻んでいる。

インダス川の流域にクシャーン朝が誕生し、カニシカ王を中心として 2 世紀頃、ギリシア彫刻の影響を受けた仏像が生まれた。やがてそれは、シルクロードを経て中国へ、そして日本へと伝えられていく。

思えば、アレクサンドロスの短い生涯からも、友情や希望、勇気や信念の大切さを学ぶことができる。今に生きる人間の人生の指針をくみ取ることができる。

私は今まで、西域の町や村を訪ね、45 年余り歩き続け、16 か国 60 回に及んでいる。シルクロードの歴史と文化が、いつも生命の奥底に横たわり、私を引きつけて離さない。これから命ある限り、釈尊や鳩摩羅什、そして、アレクサンドロス大王が築いた文明の道を歩き続け、人間と歴史の法理を考察していきたいと思う。

イタリア、シルクロードの終着点ローマ（大秦国）

イタリアで、パンテオン、カラカッパ浴場、コロッセオ、トラヤヌスの市場、フォロ・ロマーノなどローマの興亡を彩る遺跡の数々を巡った。そうした中、感銘を深くしたのがローマの国立博物館マッシモ宮の地下1階に眠る1800年ほど前の8歳の少女のミイラである。透明な長方形の棺の中に横たわる1体の死体は、エジプトの埋葬にならってミイラにされていた。当時、ローマとエジプトはダイナミックに交流しており、父母は若くして死んだ娘を愛しく思うあまり、永遠の生命観を信じて、ミイラ化したと思われる。

1964年2月、建設作業員によってローマの北15キロにあるグロッタロッサという町で、大理石でできた石棺を発見、医学や考古学の観点から、死因や年代測定などが行なわれた。特に、1993年、新しい組織のもと本格的な研究がなされ、ミイラは2世紀のもので、中国の絹の布地をまとっていることが判明した。さらに、ラピスラズリの首飾りやインドの象牙でできた人形も出土、ユーラシア大陸と交流して



ローマ帝政期に造られた円形競技場コロッセウム

いたことがわかる。この事実からシルクロードは、長安から約12000キロ、終点はローマ（大秦国）であると定義された。

次いで心に残った町は、ナポリ近郊にあるポンペイである。古代ローマ時代の都市の様相と人々の暮らしぶりを、ほぼ完全な形で残した貴重な遺跡である。西暦79年8月24日、ヴェスヴィオ火山の大噴火によって南10キロに位置したポンペイの町は火山灰に埋もれてしまった。人々は吹きつける高熱ガスや、火山灰や火砕流によって死亡した。町の上に、約5メートルも火山灰が降り積もったのである。灰は硬く固まって、埋もれた人間の肉体が朽ち果ててしまったあとに空洞が残った。研究者はその空洞に石膏を流し込み、苦悩の表情など死の瞬間の姿を現代に浮かび上がらせたのである。また、約1700年の時を経て開始された発掘によって、そのままの姿で古代都市が再現したのである。

それによって分かったことは、町は整然と区画され、住居、劇場、公衆浴場、下水道まで完備されていたことである。人口約2万人のポンペイの町とその周辺の別荘からは、多くの壁画や、モザイク画が当時の色彩を保ったまま出土した。それによると住民の暮らしぶりは豊かであり、国際的であり、そして、贅沢であったことを物語っている。



火砕流によって死亡したポンペイの貴族

ポンペイの研究者から聞いた話によれば、ヴェスヴィオ火山の大噴火のあった8月24日は、一昼夜にわたって火山灰が降り注いだという。庶民や奴隷や生命を大切にする人々は驚き恐れ、急いでローマ方面に逃げた。ところが、空が暗くなるほど火山灰が降下しても、まだ別荘や邸宅の地下に居残っていた人がいた。それは金持ちや、支配者階級に属する人々だった。苦労して集めた貴重な財宝に心奪われ、盗難にでもあったら大変だと思ったのである。

翌25日には、末期の大噴火があり火砕流が大量に発生し、その流れは時速80キロ以上、ポンペイの町を一瞬にしてのみこんでしまった。住民の歓楽と繁栄につつまれた古代都市は完全に消滅し、欲望にとらわれた人々は死んだのである。

私はポンペイの建築様式、室内の装飾、そして彫刻や鮮明な色合いを残している壁画の数々を見て回り、その文化の高さに驚嘆、と同時に自然の恐ろしさを改めて認識した。ふと頭を上げると悲劇があったことなど知らぬが、ヴェスヴィオ火山は静かに碧空の下に横たわっていた。

(文中の写真はすべて筆者撮影)

注5 朝日新聞の「文化」欄で、楼蘭王国から極彩色の壁画が発見されたことを紹介した。マスコミ側でも私の楼蘭研究の成果をたびたび引用している。毎日新聞「発信箱」では、「一つの墓を造るのに 600 本以上の木を伐るなど、人間が森林を破壊し、砂漠化を進めたという。後に栄えた楼蘭王国が、4 世紀中頃から滅亡に向かったのも、住民が土地を大切にする慣習を破って二毛作を始め、ヒツジやヤギに草を根こそぎ食べさせるなど、子孫の繁栄より、目先の欲望に心をとらわれたからだ」と、大阪教育大学の山田勝久さんは言う（学芸部、佐々木泰造）。

岩波書店の『よみがえる緑のシルクロード』佐藤洋一郎著では、「大阪教育大学の山田勝久さんによると、楼蘭王国が滅亡したことの背景には、自然の変化もさることながら人間の要素があったと考えられるといいます。山田さんによれば楼蘭一帯の人口は約 17000 人であったとのこと。これだけの人口を支える畑や、その畑をうるおす水があったわけです。どれくらいの畑があったのかはまだわかりませんが、今、人ひとりが年間に食べるコムギを 100 キロ、1 ヘクタールあたりのコムギの生産量を 1 トンと仮定すると、17000 人分の畑は最小でも 1700 ヘクタールになります。つまり少なくとも見積もっても 4.5 キロ平方の畑がなければ、これだけの人口は支えられなかったわけです」とある。『続・シルクロード 10 の謎』（NHKカルチャーラジオ、歴史再発見、2015 年 1 月～3 月）中村清次著では、当時、日本人として初めて、この「楼蘭壁画古墳」を本格的に調査された大阪教育大学の山田勝久教授は、「壁画古墳の主は《胡商、ソグド人の大金持ち》だ」と推定し、次のように述べています。「東壁（前室に入って右側の壁面）の壁画に描かれた男女の服装は、ソグド地方の男女の特徴を具えている。ベルトにある文様はペルシア風。真直ぐのびたあご髭、上衣の丸襟、使われた群青の顔料は北部アフガニスタンのもの（バダフィشان地方のラピスラズリでしょうか）、これは楼蘭貴族のものではない。服装・顔だちなどから、ソグドの大金持ち」と推測している。「この時期、ソグド人が中国本土に住みつき、その集落は、40 近くあった。……私には、極めて説得力のある論述だと思えてなりません」と述べている。

Silk Road survey report—On the Oasis of Buddhism spreading east

Katsuhisa Yamada

The Silk Road is the sea of endless sand, and it has been the road which created cultural changes between the east and the west. It has also been the stopping point when the Buddhism traveled to the east.

It was the summer of 1979 when I set foot in the Silk Road for the first time. I left Xi'an (Chang'an) and sailed up the upper Yellow River and entered the town of Tunhuang cave temple from Lanzhou via Kasai corridor. 36 years has gone by since then, and the survey of the Silk Road extends to 60 times in 16 countries. I intend to visit towns and the villages of the Chinese Western Regions twice a year from now on.

This article introduces the culture and the history of 26 cities of the Silk Road where I went, including Chang'an, Luoyang, Greece, Rome, and to India Sri Lanka. This article features the remains of Kibana thousand Buddha cave and Tokuzusarai chaitya where not many researchers have not yet set foot on.

In addition, I put emphasis on writing the details on Tunhuang, Qiuci cave temple and Loulan, the areas having strong connection to Kumārajīva. In this article there has been many statements from an interesting new viewpoint.

In my opinion, when you decide to conduct a research trip to the silk road it must consist of a road that promises you peace and safety. Unfortunately visited Palmyra, Aleppo, Damascus and Luolan that I have visited before is now impossible. My friend when he was in his youths recollected that it was a delight on visiting the Bamiyan remains. I strongly recommend that when one has the chance of going to a research trip, he/she must act on it when there is a chance.

The second condition of the trip is to be healthy. Traveling the Silk Road consists of going around the remains, therefore you will be staying the nights under the starlit sky.

It is impossible to travel if you're not healthy. It is important to have a strong feet in particular.

The third is economic power. Because we use a land cruiser and a camel, the travel budget becomes more expensive than others. After clearing these three conditions one should have good decisive attitude and courage to set foot in the undiscovered land.

It is also necessary to have the strong passion in seeking out, as a Chinese poetry says
 “For the sake to see the clear view of the far distant land, I will take this one step forward”

I used photographs as much as possible for this report. The reason is that I felt it is important understand the Silk Road by acknowledging through the sight.

December 23, 2015

●印は2015年12月現在の山田勝久調査都市（仏教歴史地図・東光書店より）

